

---

**美少女はじめました。**

ふみふみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少女はじめました。

### 【Nコード】

N1755J

### 【作者名】

ふみふみ

### 【あらすじ】

ふとした事で異世界へトリップしてしまった女子高生ミツキ。なぜか、その国のあがり症で対人恐怖症気味な王子を立派な王様にするべく、奔走するハメに・・・?!

その1。

「ありがと。後で美味しく食べさせてもらうから。」

「きゃーっ!は、はいっ!」

それじゃと言って立ち去る少女。

かわいいなあ。

背は小さめだったけど、その割に胸は立派に成熟してて……。

柔らかそう。

お願いしたら、触らせてくれないかな。

「三月。あんたまた変態ちっくな妄想してたでしょ?」

友達の久美ちゃんは、私が教室へ帰ってきた早々後ろの席でボソリと呟く。

やだな。

いつもながら久美ちゃんは、私の素直な感性を変態の一言で片そつとする。

「変態じゃないよ。だってさあ、女の子ってふわっふわで思わず抱きしめ

たくなるじゃん？しかも、今日のコなんて、すっごく大きいおっぱいな

に制服越しの形もすっごく私好みだったんだよ。」

久美ちゃんが大きな溜め息をつく。

「みんな、あなたの外見に騙されてるわ。」

そーかな。

久美ちゃんはいつも辛口。

私、カレーは甘口限定だけど、久美ちゃんは好きだよ。

「久美ちゃんみたいな控え目な胸も好きだよ。」

そう。

私は昔から近所に住む久美ちゃんが大大好きで、この女子高に入学し

たのだったって久美ちゃんと一緒に学校生活がしたいから！

私、久美ちゃんのナイトになりたい！

胸の小さい久美ちゃんにおっぱいの話はデリカシーなさすぎKY発言だ

ったよね。

私は、そんな思いでフォロー発言したのに久美ちゃんの額に青スジが見

えるのはなぜ？

「いつ！いつ私が、自分の胸が小さい事をフォローしろなんて言っ  
た？」

「フォローじゃないよ。久美ちゃんは、胸が小さかろうと魅力的だっ  
てゆー、事実を述べただけだよ。久美ちゃんが望むなら私、心臓で  
も何

でも差し出すよ！」

「あんたの心臓なんていらなからっ！」

「そんなあ〜！でも覚えててね。私は授業中でも常に久美ちゃんの  
事し

か考えてないし、寝る前には久美ちゃんが昔はベッドで一緒に寝て  
くれ

て私が腕枕してあげてたな〜って思い出すの。」

「いやあ〜っ！なんで、あんたのおかずになってる自分を覚えなきやい

けないのよ?!」

あ。

ちよつと。

久美ちゃんが両耳を抑えて勢いよく席を立つ。

そのまま脱兎の如く教室の外へ走り、飛び出して行く。

もう。

しよーがないなあ。

久美ちゃんは照れ屋さんだ。

私は軽く溜め息をついて、右手でウザイ前髪をかきあげる。

おつとつと。

私の紹介がまだだった。

私、宮木三月。

間違われやすいけど、『ぎ』『じゃなくて、みやきみつき。』

とーぜん、三月生まれ。

現在、近場の女子高に通う、ぴっちぴちの17歳。

女の子は大好き。

歳とか関係なく、女という性別には際限なく甘い。

でもって、男は全く興味ナシ！

ウチは母子家庭。

顔だけのチャラ男だった父親と離婚したいくつになっても可愛らしい

母親は、料理研究家やらフラワーアレンジメントの教室をやったり

と日々忙しい。

苦労して私を育ててくれた姿を見て、男なんていらないと幼な心に

思ったものだ。

男はごっごっしてて柔らかくない。

でもでも、何が悲しいって。

私の外見が、どー見ても男にしか見えないうって事。

175ある身長に、下手な街行く男よりも整った顔のパーツ。

地声も低めで、小さい頃から格闘技をやったせいで女子とは思えないカコブもある。

女子な髪型も似合わないって分かってるからショートヘアだしね。

外見に関しては、コンプレックスありまくり。

ただごと、この外見のおかげで週に一度は学校やら街やらで逆ナンサレたり告られたりして女の子との出会いには事欠かない。

さつきも、下級生のコから手作りクッキーをもらったところ。

調理実習で作って余ったんだって。

ちょうど小腹が空いてたから助かった。

月々のお菓子代って結構ばかにならないんだよね。

「またからかったの？三月ってば相変わらず、久美の事大好きだよね。」

久美ちゃんの次に仲のいいクラスの子、美幸がケラケラ笑ってる。

数少ない私の本性を知る一人。

久美ちゃんへの私の思いを応援してくれてる。



「当たり前。久美ちゃんだけは、誰にも渡せない。」

私とあんまり接点の無いグループのコ達がキヤーキヤー言ってるのは無視。

久美ちゃん曰く、変態妄想女の私だけど、風のウワサではリアル王子様なんてアダ名までつけられてるらしい。

けどねっ、私が王子様になるのは久美ちゃん限定なんだから！

キーンコーン

昼休みの終了を告げる鐘が鳴る。

おっと。

久美ちゃんがまだ帰ってこない。

いつもなら必ず、鐘の鳴る2〜3分前になると冷静を装って戻って

くるのに。

おかしい。

私は席を立って、美幸に向かって叫ぶ。

「ちょっと探してくる！理由、適当に言っというて！」

急ぎ教室の後ろの扉から飛び出す。

久美ちゃんってば、どこ行っちゃったの〜？

学校中いたる所を見て回ったのに久美ちゃんがない。

真面目な久美ちゃんが授業をサボったりなんてするわけない。

おかしい。

なんだろう。

嫌な胸騒ぎがする。

不安を押し隠して、私は屋上へと向かう。

前に何度か屋上でお昼を食べた事があった。

もしかするといえるかもしれない。

僅かな期待を込めて階段を昇る。

ぜえぜえ

息を切らせながら、屋上の扉を開けて飛び出す。

そこに屋上はなかった。

底なしの間。

間がぼっかり口を開けて、待ってましたとばかりに勢いよく屋上に

飛び出した私を飲み込む。

ああーっど！

急に止まれるわけもない私はまっさかさまに落ちていく。

「うわっ！なんじゃこりゃ〜！〜！」

落下する私。

モノローばかりにスカートを抑えてみるけど抑えきれぬわけない。

こんな事ならジャージの下、履いとけばよかったあ〜。

悔やみきれない後悔を抱いて私は屋上で無いどこかへと吸い込ま

れていった。

その2。

「三月にならないよ。」

私を押し倒して、上に覆い被さる久美ちゃんが恥じらって言う。

「何が？」

首を捻る私の頬に、久美ちゃんがそっと口付ける。

ひゃあっ！

ホントに!？

「私の口から言わせるの？」

「聞きたい。久美ちゃんの声で聞きたい。言ってくれたら何で

もしてあげる。」

久美ちゃんの目を見てたら、急に視線を外される。

あれ？

なんで？

「三月にあげるよ。私のバースデー……」

おおーっ！

マジですか？

夢？

夢じゃないよね？！

私の妄想の中でもないよね？

ヤッバイ！

嬉しすぎて鼻血出そう。

私の胸に顔を埋めて顔を上げない久美ちゃん。

大丈夫。

照れてる久美ちゃんもすつごくかわいい。

私は久美ちゃんの顎を右手の人差し指でクイツと持ち上げる。

潤んだ瞳。

グロスで艶めいた唇。

小悪魔な久美ちゃんがそこにいる。

「震えてるの？・・・大丈夫。安心して。優しくするから。」

「ホントに？」

「久美ちゃんに嘘なんて言った事ない。

恥ずかしがる久美ちゃんも、強気な久美ちゃんも全部丸ごと

大好きだから。」

「じゃあ、三月も目を開けて。ちゃんと私の事見て。」

えっ！

私今、目開いてるよ。

こんなにハッキリ久美ちゃんの姿が見えてるのに。

「ほら、早く」

途端に感じる瞼の閉じた感覚。

早く久美ちゃんの姿を見たくて重い瞼を開ける。

「！！！」

目を開けた私の視界にうつりこむ顔！

こ、こいつはっ！

さっき私を押し倒した久美ちゃんのポジションにいるこいつは！

「男！！・・・ふっざけんなあっ！！！！」

私は小さい頃から、久美ちゃんを守る為、格闘技や護身術やら習いまくった。

その為、体が勝手に無意識の条件反射みたいに無駄なく動き、  
啞然とする男の胸ぐらを掴み、股を蹴りあげ投げ飛ばした。

マンガみたいに弧をえがき空中を舞う男。

「ぐえあっ！」

トマトを地面に投げつけたらこんな効果音がステキだなんて  
声をあげて男が地面に叩きつけられる。

へーんだ。

女だと油断したのがバカなんだよ。

男は気を失ったらしく、ピクリとも動かない。

ざまーミロ。

パンパンと両手をはたいて、すぐ近くにある小川まで手を洗いに行  
く。

バシャバシャ



う〜。

気持ちいいっ！

暑いくらいの陽気だから顔も洗おう。

バシャバシャ

あ。

拭くものないや。

ま、いつか。

制服で拭いちゃおう。

スカートのある部分をまさぐるも空をきる。

おかしいなって感じに視線を下へ。

「あ？あれね？」

更ながら気づいてしまった。

うっそお〜！

「なんで私、全裸なのっ?!」

パンツどころか、完全な裸族じゃん。

いいーっ！

しかも。

しかもっ。

ワタワタと私は小川の水面を覗きこむ。

その水面に映る人間を私は知らない。

金色のストレートロングな髪は背中の中ばまで。

スカイブルーの大きな瞳に、ぷるんとした唇。

すーっごく顔だけは可愛らしい。

なのに！

首から下は、可愛らしさってゆーよりエロス全開！

たわわに実った豊満なバストに綺麗なピンク色の乳首。

そのくせ、ウエストは凄く細い。

ボンツキュッボンツってカンジ。

まさか、これが私なの？

信じられないっ。

思わず鼻の穴に両手の人差し指を突っ込む。

水面には、可愛い少女が鼻に指を突っ込んでいる姿が映る。

うわっ！

美少女が鼻の穴に指突っ込んでんよっ！

こりゃ間違いなく、今の私だ。

夢にしては、やけにリアル。

私、屋上にいたよね？

しかも、周囲を見渡せば辺りは森。

その手前にこの小川がある。

どうよこじっ？

あ。

そーだ。

さっき投げ飛ばした男に訊いてみるか。

小川の横、数メートル先で伸びている男の元へ向かう。

さっきは気づく余裕なかったけど、近づいてみたら男の格好がヤバイ！

「中世ヨーロッパみたい。．．．しかし、白タイツ、ホントに履いてるヤツって初めて見たわ。」

イメージ的にダサイ感じかと思っていただけ、そーでもない。

顔のせいかな？

気を失い目を瞑る男の顔はとても整っている。

リアル王子様とかってこーゆー顔を言うんかな。

「う．．．うん．．．」

じーっと見てたら、白タイツが身動き始めた。

お。

目覚めるの早い。

白タイツは、気がついたらしくゆっくり目を開ける。

「ちいーす！お目覚め？」

「！！！！」

白タイツの顔を覗きこんでいた私は、男が驚き飛び起きるのを持ち前の運動神経でヒラリとかわした。

あつぶないなあ。

頭突きくらうトコだったよ。

「レ、レディ、頼みが！な、何か服を身にまとってください！」

白タイツは、顔を真っ赤に染めて叫ぶ。

着たいのはやまやまだけど着替え無いし。

「服ないから無理！」

私も白タイツに負けないくらいの声で叫び返す。

「服がないって……ここまでまさか裸で来たわけじゃないでしょっ？」

まさか！

さっきまで制服を着てましたよ！

「ここはイセバンドールの国有地で、庶民は入れないはず。

あなたは何者ですか？」

え。

そーなの？

じゃあ、ひとんちに不法侵入しちゃってるのか。

急に弱気になる私。

「悪気があるわけでも変な趣味があるわけでもないんですけど、

勝手に入ってごめんなさい。ついでに何でもいいので服貸してください〜」

テヘへって感じで左手で後頭部を触り、ペコペコする。

胸おもっ！

ゆっさゆっさ揺れる乳房。

今まで久美ちゃんと並んで歩いても笑われないように、男らしく

意識して行動してたから、いきなり女の子らしくって難しい。

「わっ、分かりましたから！と、とにかく、城に行きましょう！」

どこを見ていいか分からないってカンジにその男は私から顔を

そむけて言った。

「はいはい！」

裸族な私は、どこを手で隠せばいいんだろう？

やっぱ、茂みか？

胸は見たら幸せな気分になれるもん。

チン毛見せられて喜ぶのはマニアックだと思うしっ。

あ。

でも、久美ちゃんのチン毛だったら見せられても嬉しいな。

そんな事を真面目に考えつつ、トコトコと男の後をついて行く。

「マリアス様っっ!」

遠く叫ぶ声が聞こえる。

マリアスって誰?

もしや、この白タイツ?

森から現れたのは、じいやってカンジの執事っぽいじーさん。

「探しましたぞ!マリアス様!」

はあはあ息が切れ切れになってるところを見ると探しまくったんだろ  
うな。

そんなじいやに向かってキラキラ王子が叫ぶ。

「カルダス!見つけたぞ!彼女こそ、我がイセバンドールの守り神  
に違いない!」

うえっ！

ちよっ。

ちよっ。

ちよっと待ったあー！



その3。

三人が横一列になって城までの道のりを歩く。

「さ、寒くはないですか？」

マリウスは耳を真っ赤にしつつ、私に話しかけてくる。

さつきから気になってたんだけど、マリウスは見た目少女漫画に出てくる王子様そっくりで、大抵の女子ならほわわ〜んってなっちゃうだろう容姿をしているんだけど、どうにも頼りない。

私との会話もたどたどしい感じ全開。

この人、多分この国でも偉い部類の人だと思うんだけど、こんなんで大丈夫なのかこっちが心配になる。

「大丈夫。」

私が簡潔に返事すると、肩を落として無言。

そんなにガツカリしたリアクションされても……。

憂鬱な気分を晴らすように私は専らマリウスの部下っぽいおじさまのカルダスさんに話しかける。

「上着を貸してくれてありがとうございます。カルダスさん  
・・・でしたっけ？」

カルダスさんはパツと見た目、ウチの母親より年上っぽい印象。  
ロマンスグレーなカンジでとっても安心感を与えるのが上手そうだ  
裸だった私はカルダスさんから上着を借りて着ている為、裸族から  
は卒業できた。

流石に自分という気が今だしないんだけど、ストリートキングをや  
る度胸もない。

カルダスさんは、裸の私を見ても取り乱したりはせず、これをと  
言って自分の着ていた上着を差し出してくれた。

よかった。

ホントありがたいよ。

カルダスさんは、私にっこり微笑みかけると左手の手のひらを  
向けて自己紹介してくれる。

「私は、マリアス王子の教育、その他指導の一切を取り仕切って

いるカルダスⅡセレスタリアと申します。以後、カルダスとお呼びください。」

そして、今度はマリマスの方を手のひらで指し示して言う。

「こちらは、マリマスⅡファントクライブ。この国、イセバンドールの第一王位継承者であらせられます。」

え〜。

本物の王子様？

生王子だ！

スゴイ！

私がマリマスを見て驚いていると、当のマリマスが更にバタバタと慌てだす。

落ち着いてくださいよ。

将来、国のトップになる人がこんなに動揺を表に出しちゃマズイでしょう。

「失礼ですが、貴方のお名前を聞いても？」

「あー。私は、みやきみつき。ミツキって呼んでください。」

日本では、女子高生してました。」

「ジョシコウセイとは？」

カルダスさんが、興味深そうに尋ねてくるので私は言いなおす。

「女性だけが通っている、高等学校の事です。その学生なんです。」

「

「ほほう。女性ながら高等教育を受けてらっしゃるのですか？」

あれれ？

このイセバンドールとかいう国では、女性は学校行ったりしないのかな。

私の疑問を読み取ったカルダスさんは、ふむって頷いて説明してくれる。

「イセバンドールでは、女性は初等教育までの方がほとんどですね。」

貴族の姫君は、学校を出られると大抵は結婚されてしまいますね。」

初等教育終わったら結婚？！

「早すぎないですか?!」

思わず突っ込む私にカルダスさんはニッコリ。

「……なので、高等教育を受けている女性の方は大変に珍しいのです。」

「……ミツキ様。」

なんだかカルダスさんの背中から、悪魔の羽がぼんやり見えるんですけど……？

「マリアス様の教育係の一人になってはいただけませんか？」

ふぁ?!

私が？

ムリムリ。

そんな大層な事できませんって。

断ろうと口を開こうとした私を遮って、カルダスさんが言う。

「そもそも、この場所に不法侵入された方は重罪に処されます。」

それを、マリアス様の温情で免赦していただくことというのに

まさか……断るなどとはおっしゃらないですよね？」

うぐっ。

な。

なっ。

このおっさん……。

かなりいい根性してる。

無害そうな外見にだまされる方がいけないとばかりに、微笑んで

返事を促される。

だめだ。

勝てる気がしない。

私は、見ず知らずの異世界で王子様の教育係という、とんでもない

仕事に就くことになってしまったのだった。

その4。

久美ちゃんへ悲しいお知らせがあります。

私、今、異世界にいます。

しかも、トリップ直後に職にありついてしまいました。

この国、イセバンドールの王子様の教育係です。

笑っちゃうよね。

久美ちゃんは、あつたま良かったよね。

私は、合格圏に入った事のない女子高に愛の奇蹟でギリギリ合格。

昔から練習より本番に強い私に、久美ちゃんはうらやましいって

言ってたよね。

私からすれば普段からできる久美ちゃんの方が何倍もすごいしリス  
ペクトだよ！

って事で、しばらく帰れそうにありません。

一秒でも早く久美ちゃんの元に帰れるように私、頑張るからねっ！

城へと着いた私をカルダスさんは客室らしき部屋へと案内してくれる。

道行く人々が、チラチラと顔はこっちを見ないで視線だけ

こちらに向けてくる。

しょーがないじゃん。

私だって好き好んで裸だったわけじゃない。

男モノの上着を着て、お尻は出てないけど素足で歩いてたら

訳ありっぽいもんね。

横を見るとリアスの笑顔にぶつかつた。

うわっ！きらっきらしちやってますよ。

ひきつる私。

リアスは、私が自分の教育係の一人になると聞いた瞬間、飛び上



がらんばかりに驚いてカルダスを見ていたが、カルダスがコクリとひとつ頷くと観念したみたいに頷いてみせた。

そんなマリウスは城に近づく程、オドオドと落ち着きがなくなつて、城内に入った頃には時々私に笑いかける時以外は、下を向いて歩いている。

口数もそれほど多い印象はないけど、城内にいる今は全くと言っていい程しゃべらない。

ま、黙つててくれた方がこつちとしては楽でいいけどさ。

「さあ、着きましたよ。こちらの部屋です。」

カルダスさんが扉を開け、うちら二人に内に入る様促す。

わあ〜！

すっごく広い！

あ。

テンガイつきのお姫様ベッドがある〜！

私はダッシュして、ベッドへダイブ！

うはっ！

ふっかふかだよ。

しかもダブルベッドだから広い。

うつ伏せから仰向けにクルリと回転して体を起こすと、マリアスとバッチリ目があってしまった。

「マリアスって、いつもこんなホカホカな布団に寝てるの？」

「……。」

しーん。

固まってる。

何も言ってこないから、私は違う言葉をかける。

「ねーねー、マリアス。何か着るモノ貸してくれない？」

「……。」

今だフリーズしたまま帰ってこないマリアスに焦れる私。

「おーい！おいつー！」

普通の声のトーンから突然、私は叫ぶ。

その声にビクツとなって再び動き出すマリアス。

そして、私の方を見て本日、一番の笑顔を見せて言う。

「あ……す、すまない。マリアスって呼ばれたの初めてで……」  
「はあ？」

私がキョトンとしているのを見て、マリアスは急にシドロモドロになる。

「い、いや。今まで……そんな気軽に呼んでくれるようなひ、人に  
出会った事なくて……」

「は？マリアスをマリアスって呼ぶ以外にどう呼ぶってのよ？」  
意味が分からん。

「う、うんっ。そーだよね……。わ、私も……ミツキと呼んでも  
いいだろうか？」

「別にいんじゃない。って、だから他にどう呼ぶわけ？」

私の問い掛けは頭にはいらなかったらしく、マリアスは何度も  
ミツキミツキと連呼する。

あ……。うざったい。

最初の1、2回は返事してあげたけど、あまりに連呼するので私はベッドから起き上がって、マリラス向かって突進する。

すごい勢いで近づいてくる私に一步後退するマリラスの後頭部を

私はツッコミっぽく叩く。

「しっつこい！」

ぱーんっという音がする。

それをうつかり見てしまったカルダスは鉄面みだった

ポーカーフェイスを崩す。

「ミツキ様！王子になんて事を！」

「えっ？そーいえば・・・アンタ王子だったわ・・・」

忘れてたとは言わないが、王子がどれだけ偉い人なのかよく分からない。

こんなヤツに教育係とか無理じゃない？

「い、いや。カルダスいいのだ。私は・・・嬉しい・・・」

「ですが・・・」

「ミ、ミツキは私を腫れ物の様に扱わない。こ、これからも

畏まる必要はない。」

お？

なんか私、マリアスに庇われてんの？

そんな悪い事した覚えはないけど・・・一応、感謝してーっと。

「マリアス。ありがとう。」

テヘへって感じに笑ってみたら、途端マリアスの顔が湯だった

みたいに赤くなった。

ん？どーした？

私はマリアスの顔を覗きこもつとする。

頭叩いた後にそんな赤くなるなんて！

私、強く叩きすぎたかもっ！？

頭の障害は少し遅れて出てくるんだから。

私は不安になってマリアスの頭髪をガシッと掴む。

「えっ！？あっ？ミツキ？どこを持って・・・」

えっい。静かにしなさい！

私は、カルダスの死角になるマリアスの腹に裏拳を叩き込む。

「うぐっ！」

体をくの字にしてうめくマリアスの頭を私はコブとかないか調べてみる。

うん。

見て触った感じではどこも変じゃない。

よかった。

その5。

「ミツキ様に教育していただきたいのは・・・見て分かるかと思  
いますが、王子の

オドオドした態度。まあ、複雑な事情もあるのですが、それでもっ  
！」

ダンッとテーブルを拳でおもいつきり叩くカルダスさん。

そんな熱くならなかったっていーんじゃない。

「王族としての威厳ゼロ！しかも、大のあがり症で人付き合いも苦  
手なのです。

城内を歩く姿もほとんど見ない為、城にいる者でも王子の顔を知ら  
ない者が多数

いるくらいで・・・。

国民に至っては、名前は知っていてもまず顔を見た事はないはずで  
す。」

そーなんだあ〜。

まあ、最初見た時にはこんなんで王子とかって大丈夫？って私も思  
っちゃった

けどな。

現在、マリアスは別室に着替えに行っている。

私も、メイドさんがやってきてあれやこれやとなされるがまま着替えて、準備

が終わった頃にカルダスさんがタイミングよく現れて現在に至る。

「ミツキ様に行っていたいただくのは、マリアス様を将来、王様としてこの国を

しよって立つにふさわしい度胸をつけていただきたいと思います。」

ええーっ!?

私がああ王子に度胸をつけさせるって!

無理です!

もうキツパリ言いきっちゃうけど、できるわけない。

第一、どーやって?

「できません。だって、私に対してもあんなにオドオドしてるんですよ?。」

だんっ!

さっきはカルダスさんが机を叩いてエキサイトしてたから、真似して私も



テーブルを拳で叩いてみた。

お。

今度はカルダスさんがビククリしている。

やったね。

「ダメ元です。やらずに拒否は聞きません。

明日から毎朝、マリアス様の部屋へ行くように！

それから、ミツキ様のお世話はこちらのシラキが行います。」

カルダスさんは、側に立っていた女性を私に紹介だけするとサツサと席

を立ってしまふ。

あゝ。待って〜。

それじゃと片手を挙げて部屋を出て行くカルダスさん。

ホント、ひどい。

異世界トリップものの小説とか読んだ事あるけど、普通はもっと事情を聞いてくれて親切にしてくれたりとか、もしくは反対にヒドイ扱い

を受けたりとかするんじゃないの？

何、このヌル〜イ扱いはっ！

事情も聞かれないし、いきなり問答無用で王子の教育係とかに

しちゃっていいの？

私が心配する事じゃないのかもしれないけど、この国のセキュリティ

レベルとか大丈夫？ってカンジ。

私でいいの？！

知らないよ？

その6。

シラキと名乗るメシツカイの少女と密室で二人きり。

多分、私と同じ年くらいかな。

カルダスさんが出て行って二人きりになってしまった。

しーんっ

ちょっと話してみたいな。

友達になれないかな？

私が期待を込めて声かけて光線を放つ。

気配に気づいたシラキは私と目が合うとにこやかに微笑んだ。

あ。

このコ、笑うと可愛い。

赤毛をミアミアのおさげにしている。

化粧っ気がないのに肌が綺麗なのも好感度高い。

「ミツキ様。いかがなされましたか？」

しまったあ〜！

あれほど求めていたしゃべるきつかけなのにつ！

話す内容とか考えてなかった……。

「……いや、シラキって赤毛なんだね……」

「はい。……赤毛は、お気にめしませんか？なら、他の者と交代いたします。」

シラキの眉が一瞬下がる。

その時の私は赤毛がイセバンドールでは少なく、流民に多い色だという事や、

貴族の中では赤毛を嫌う者もいるという事などももちろん知るよしもない。

赤毛は初めて見たけど、きちんと手入れもされていて艶もあるし、何より私は

シラキの笑顔にハートを射抜かれちゃったみたい。

「え？私は好きだけど……ねえ、シラキ。

ちょっとシラキの髪を見せてくれる？」

「えっ？！め、めっそもないですっ！」

「私ね。シラキは髪を下ろした方が可愛いと思うの。ほらっ！」

「きゃっ！からかうのはおやめくださいませっ！」

私はシラキににじり寄って縛っていた紐をほどいた。

みつあみがほどけてソバージュみたいに波うつて背中まで流れる髪。

そのひとぶさを手ですくって軽く口づける。

「シラキ。からかってなんかないよ。私は自分に正直にしか生き

られないもの。私の前でシラキが笑っててくれると嬉しいな。

私が今、シラキに頼みたい事といえばそれくらいかな。」

「ミツキ様……、私の様な者にもそんな労わりの言葉をかけて

くださるなんて……。私、ミツキ様のためになんでもいたします  
っ！」

頬をほんのり赤く染めて、シラキが私の両手をしっかりと握る。

ん？なんだかシラキとは仲良くなれたみたいだ。

どうしてだか分からないけど、ダチ友一人ゲット！

その日、後からやってきたマリナスに私はイセバンドールの事を  
これでもかってぐらいに質問攻めにして分かった事！。

イセバンドールは形式だけは王権君主制をとっているものの、実際  
は有識者を

集めて話し合ったりと民主国家っぽい感じで国が運営されている。

メンバーは身分の上下は問わないと言う事になってるらしいけど実  
際は貴族が

半数以上を占めるそうで、民意はあまり反映されていないのが現状。  
暦は365日。時間の概念も日本とほぼ変わりなし。

日本のような雪が降る冬はないそう。

教育は基本金持ちの貴族がメインで初等学校八年、高等学校が四年

間。

女性の結婚適齢期が18歳らしいので、八歳で初等学校へ入ったら  
高等

学校を卒業する頃には二十歳になってるわけ。

ナルホド、女性で高等学校へ行く人が少ないってのは頷ける。

ちなみにマリアスは、今年高等学校を卒業したらしい。

三つ先輩…には見えないなあ。

そもそも、ハタチの男にしては痩せすぎだと思つた。

男ならこんもり膨らむ上腕二頭筋がなくなっちゃね！

あと、男くさしいカンジが皆無なものもどうかなく。

日本でならユニセックスな人種も好きな人いるんだろうけど・・・

カルダスさんや城にいる兵士ぐらいしか見てないけど、みんなそれ  
なりに鍛えてる感がある。

顔のつくりはかなり整っているだけに、これで筋肉ムツキムキになっ  
たら女性にモテそうな気がする。

うん、絶対的に国民人気も高まるに違いない。

よしっ。明日からはまず男らしい肉体づくりから始めよう。

私はマリアスに明日の予定を告げる。

途端、マリアスはエ〜って顔を隠そうともしない。

「わ、わ、私は剣は苦手で・・・」

「分かってるって。大丈夫。私だって剣なんてできないもん。」

私ができるのは肉弾戦のみだからね。

「ミツキと戦うのか？そ、それはダメだ！」

「え？何で？」

「ミツキは女性だ。レディに手はあげられない。」

「ばっかねえ〜。言っとくけど私、マリアスより多分強いよ？」

「け、けど・・・」

「じゃあ、明日皆が起きる前に、一回だけ手合わせしてみよう。

それで判断しましょ！じゃあ、明日の朝5時にね。」

格闘家の朝は早いよ。

あ〜。体動かせる〜。



なんだか明日が楽しみになってきた。

げんなりするマリアスと私はルンルンしてシラキに明日の為の動きやすい

服を用意してほしいとお願いする。

「わかりました！男モノになってしまいますがズボンをご用意いたしますっ！」

「うん。よろしくね。」

その7。

イセバンドール城内、早朝　　。

この世界では女性はズボンをはく習慣がないそうので急遽シラキに用意して

もらったズボンは男モノを裾あげしてもらったもの。

朝の冷たい空気をいっぱい吸い込んで、私は迎えに来たマリアスと共に

外へと出た。

毎日のトレーニングを欠かした事のない私は逸る気持ちを抑えて後ろを歩

くマリアスを振り返った。

「庭でやる?」

「えっ、い、いいえっ。へ、兵士達の鍛練場があるからそこで・・・」

「すごいイヤそうにマリアスが答える。

私は当然無視。

へえ〜。

鍛練場があるんだ。

この時間ならまだ誰もいないだろうという事で、私達はそこへと向かう。

この国では、女性はズボンをはいちゃいけなかったり、剣術なんかもやってはいけないんだって。

他にも色々制約があるんだけど、その反面、とくに犯罪などでは男性が

女性に対して何かした場合、刑がハンパなく重いらしい。

マリナスが渋る理由のひとつが、男性が女性に手をあげて怪我をさせる

と女性が訴えれば、わざとでなくても処罰されちゃうって事。

だから、女性とパツと見た目分らないように私は髪を結い上げ帽子を

被り、服装も貴族の男児っぽくしてもらっている。

ホントがさつな私にとって、イセバンドールは面倒な国だ。

「同じです・・・」

マリナスに案内されたのは学校の体育館より少し広い屋根のついた

空間。

ふん。

思ってたより広いな。

「じゃあ、ウォーミングアップから！まずは、私の後についてきて  
！」

私は、羽織っていた上着と帽子を床に脱ぎ捨て、準備運動から始める。

上着を脱いでしまうとさすがに女性と分かってしまう。

なんせ、この世界での私はナイスバディーだからね。

細い体型は服で隠せても、男にはない胸の膨らみは隠せそうにない。

ま、誰も見てるヤツいないし、見られても減るもんじゃないからいいんだけど。

全身をゆっくりストレッチして、固くなった筋肉を解きほぐす。

それから鍛練場の端から端までを何回かダッシュする。

あっという間に体が熱くなって額からは汗がにじみ始めた。

「よしっ！じゃあ、始めようか。いつでもこーいっ！」

私は後ろを振り返ってマリナスと対峙する。

「じゃ、じゃあ行きますね。ちゃんと避けてくださいね。」

「わかってるって!」

マリナスが期待通りのへなちょこパンチをしてくるのを私は何なくかわす。

蚊がとまれるんじゃないかってくらいに遅いパンチ。

ハナシにならないんだけど。

試しに上段蹴りで空をきってみる。

シュツと風を切る音。

空手の型みたいに突いたり蹴ったりを何回か繰り返して分かったのは、

パワーと手足のリーチが少なくなっではいるけど体の動きは以前と変わらないって事。

おしっ!

これなら何とかなりそうだ。

私は、マリナスに向き直ると腰を屈め構える。

「じゃあ、私も蹴り行くよ!」

体をひねってその遠心力を利用してキック！

「ウゴッ！」

あ。ごめーんっ。

マリアスの腹にモロに入ってしまった。

漫画みたいに綺麗に吹っ飛んだマリアスはそのままゴロゴロと地面を転がった。

止まってもピクリとも動かない。

アレ？

もしかして気絶させちゃったのか？

「おーい！」

私の叫びにも反応無し。

どうしよう。

困った。

私がマリアスを背負って部屋まで戻らないといけないのかな？

うーんっ。

と、その時！

「へえ、たまには朝早くに来てみるもんだな。」

誰?!

鍛練場の入口に立つ騎士だろう男。

「うわぁっ!」

私は慌てて頭に手をやる。

バ、バレてるよね!?

こーなったら開き直るか。

「誰よ!覗き見なんて卑怯よっ!」

勝手に使ってたのはウチらの方だけど。

男は笑いながら肩を僅かに竦める。

「女性がこの鍛練場にいるとは……。今日見た事は秘密にするか  
ら。」

俺とひとつ手合わせしないか?」

え。見逃してくれんの?

男の提案は、動きたりない私には願ってもない事。

やったね！。

「分かったわ。組手ならお相手するわ。」

「組手？」

「武器は使わないって事。使えるのは己の肉体のみっ！」

ビシッと私は男を指差す。

男は一瞬きよんとしたが、ニヤニヤした笑みを浮かべる。

「女のアンタの体は肉弾戦向きじゃないと思うが？・・・まさか、あっち

の肉弾戦じゃないだろーなあ。」

カチン！

男が私にそんな下ネタ言っていていいと思ってるのっ！？

私は、男に向かって走る。

至近距離に入った男の足元を被う。

パワーには頼れないからバランスを崩させてそこを攻撃するしかない。

バランスを崩しながらも辛うじて私の射程範囲から出た男が反撃する。



男のパンチをぎりぎりですぐ避ける。

あ。このエロ男、それなりに強いかも。

久々に手応えのある相手にあつた喜び。

お互いにニヤリと笑う。

こりゃ、負けたくない！

男のパンチを避けた私は、再び足元を被おつとする。

「また同じは芸がないぞ！」

すんなり避けて私に向かってくる男。

かかったな！

私は男の胸ぐらをつかんで……、一気に投げ飛ばした。

どーだつ！

柔道なら綺麗に一本ってカンジ。

受け身とかしらないのかモロに地面に叩きつけられる男。

「参った。俺の負けだ。」

すんなり男は負けを認めてしまい私はまたもや物足りない。

倒れる男に片手を差し出し起き上がらせる。

「この国では今みたいな技って習ったりしないの？受け身をとれれば投げられても被害を最小限に抑えられたはずなんだけど……。」

きよとんとする男。

そして、あははと高笑いし始める。

ちよつと……頭の打ちどころが悪かったんじゃないでしょうね。

「あんだ、俺が今まで見た女の中でもとびきり美人な上に強いんだなあ。」

俺、あんたに弟子入りしたい！」

はあ？

何言ってるの？

私は弟子なんていらないし、マリアスをムツキムキにするとゆー使命があんのよ。

「弟子なんて、いらない！散れっ！」

しっしと追い払う仕種。

「トッッッ！」

「何が悲しくて、男の弟子なんてとらなきゃいけないのよ！」

そーだ、そーだ。

女の子ならまだしもこんな体格いい、いかにも男なヤツを傍に置かなきゃ

いけないんだっての。

よく見れば、マリラス然り、この男もかなりの美形。

マリラスが中性的美形なら、こっちは笑顔の爽やかなスポーツマンタイプ。

ま、私の対応が外見なんかで変わるわけもない。

「嫌だ！ぜってー、アンタに勝って弟子を認めさせてやるっ！」

「はんつ。そんなの返り打ちだから！」

あ。

しまった。

ついうっかり、再戦を受けてしまっただけか私？

この日から、私とマリラス、そしてコイツとの朝練が始まってしまった。



その8。

「とりゃ！」

「甘い！！」

男の攻撃を拳一つ分で避けた私は、攻撃をした事によって防御の甘くなつた

脇を右手で思いっきり掴み、反対の腕で男の頭部を抑えつける。

これで男は頭が上がりず、次の攻撃に移れない。

やったね〜。

今日も私の勝ちだ。

あれから3日が過ぎた。

私は、早朝5時から兵士の訓練が始まる7時前までをマリアスとそれから

例の男と共に過ごす。

例の男           アイツは、イセバンドールの騎士団で副団長補佐として働いて

いるラディ=ウインスター。

マリナスとはタメの20歳。

茶髪短髪の猪突猛進なバカ。

腕はいいのに、もうちょい頭使って動けばいいのに。

でも、この3日でぐんぐん物事を吸収していく。

バカだけど、憎めないバカ。

私の事もホントに誰にも言っていらないらしい。

「くっそ〜！今日こそはいけると思ってたんだけどな・・・。」

悔しがるラディに私はへへ〜ンって感じに胸をはる。

たわわに実った乳房がブルンと揺れる。

「ホント、いい女だよなあ。」

それをうつかり視界に入れたラディが呟く。

「セクハラ野郎！死ね！」

私は容赦なくラディの腹に蹴りを入れる。

不意打ちの苦痛に無言で蹲るラディ。

それを見ていたマリナスがブルブルと小刻みに震えている。

大体、最初の1時間半をマリアスとの基礎に費やし、残りの余った時間を

ラディとの組手に費やすというのが1日の流れ。

ラディは日中の騎士としての仕事にどうやったら私から一本取れるか考

えるのが楽しみになっているそう。

私は私で、朝の訓練が終われば後は何をしてもいいので、シラキヤカ

ルダスにイセバンドールについて学び、空いた時間は筋トレに費やしている。

早く腹筋割れないかな。

カルダスさんは、私が筋トレするのに反対みたいで眉をひそめている事が多い

が、マリアスが自ら部屋を出る機会が増えた事には感心しているようだ。

いつも来るたびに、しきりに私を褒めて帰ってゆく。

シラキは、世間話や一般的な女性に今流行っていることなどを面白おかしく話

してくれる。

私の中では、シラキとの時間が一番楽しい。

シラキは私とタメの17なので、世界は違ってても何かと通じるところが多いし。

そんな風に私の中の時間は、ゆっくりと進んでゆく。

「なあ。今日は非番なんだ。町へ行かないか？」

4日目の訓練が終わった後、ラデイが言う。

町。そーか。

私まだ、町に行った事ないや。

行きたい。

私は、マリアスの服の裾を軽く引っ張る。

「えっ……。ま、まさか……。」

マリアスがオドオドと言葉を詰まらせる。



「そう。マリラスもついてきて。」

マリラスの手を握って、私は頷く。

カルダスさんからマリラスは、私との訓練以外ではほとんど部屋から出ないって聞いた。

学生時代も集団生活ができなくて、特別に教師が部屋へやってきて

講義をしていたそうだ。

だからっ！

みんなで一緒に出かけよう？

大丈夫だよ。

外の世界は嫌な事だけじゃないんだからね。

その9。

さあ、行くわよ！

その後、私達は着替えて再び集合。

私は、シラキに用意してもらったいくつかの訓練用の男装服の中のひとつを

身に纏って帽子を被る。

結った髪はいつもの如く帽子の中にしまっている。

ラディは、普段の騎士としての服ではなく完全に私服。

黒のズボンに凝った作りの白いシャツを着ている。

足ながっ！

で、マリナスはと言うと。

「ねーねー、マリナス。もうちょい地味な格好の服はないの？」

「えっ……だっ、ダメなのか……」

狼狽するマリナス。

だってさ、これじゃ見るからにイトコのお坊っちゃんだよ。

カツアゲ対象ロックオンだつて。

「ねー、ラディの服貸してあげてよ。背丈だつて二人ともそんなに変わらないし……。」

「いいけどな。背丈はそうだが、ブカブカじゃないか？」

まあね。

ラディは胸板厚い騎士で、マリウスは痩せすぎのもやしっ子だからね。

でも、今着てるヒラヒラブラウスよりは目立たないと思うの。

ラディには、朝練初日にしてマリウスの事がバレている。

たまたま副団長と共にマリウス王子の顔を見た事があつたらしくて、王子

の教師なんだと言つたら協力してくれる事になつたのだ。

「ブカブカでもいいよ。今より悪目立ちしない格好でお願いね。」

「おーよっ。任せとけ！」

「えっ……あっ……」

ラディがマリウスを引っ張って城へと戻って行くのを手を振り見送る。

しばらくかかるだろうから、私はその間に筋トレやってよーっと。

15分後　　。

私の前に現れたマリィスは私の予想を遙かに越えて……。

「ちよっ、ちよっと……ラディィ！あんたどーゆーセンスしてんのよっー！」

青いつなぎに赤いシャツそれに赤い帽子って……。

「マリィス！今からアンタの事、マリオって呼ぶからっ！」

随分男前だけど、どー見ても某ゲームの主人公だよ、その格好はっ！

「マ、マリオ!?!」

マリィスだけが意味分からんままに動揺してる。

「そーだな。マリィス王子の名前は偽名にしといた方がいいもんなっ！」

よし、マリオ行くぞ！」

ラディがマリアスを引っ張って行く。

偽名！？

あ、いや、そんな考え欠片もなかったよ。

まあ、いーか。

こうして私達は町へと延びる道を歩いて行く。

「今日は、マリオの町に来る用の服を買おうと思うの！」

ホントは、私が町に来る用の服を買う予定だったんだけど、毎回マリアス

にこの格好させるのは気の毒な気がしたので目的変更。

お金はカルダスさんからしっかりもらってきたから大丈夫。

私達は、ラディの案内で店を何軒か巡り、次々と荷物を増やしてい

った。

その間、マリウスは着せ替え人形のように差し出された服をひたすら黙って試着。

一応、マリウスの意見も最初は聞こうと思ったんだよ。

でもねっ、ほとんど城から出たことない引きこもりに近い生活してたマリウス

だもん、服のセンスが微妙極まりないって事に気づいてしまった私は自分のセ

ンスだけを信じる事にした。

夢中になってると時間ってあっという間に過ぎるよね。

ふと気づけば、昼過ぎになっていた。

「昼！昼食！ゴハン食べたい！」

私が二人に言うとマリウスが真っ先に安堵の表情を見せた。

「・・・やっと・・・解放される・・・」

「おしっ！じゃあ、イセバンドール城下で、俺が一番だと思っ飯屋に行こうぜ！」

「お。いーね。行こう、行こう！」

私もう腹ペコだよ。

ラディの後について行く。

「よし、ここだ！」

開けた木の扉の先に広がる食堂に心弾ませる私。

ウッド調の壁に丸い木製のテーブル。

イスも木でできてて、店内奥にはカウンターとずらーっと並ぶ酒瓶。

店内に入ったとたん、漂う酒の香りに思わず顔をしかめる。

ちよっと！

こっつて、酒場じゃないの!?

私、未成年なんですけどっ。

「この料理は安くて旨いんだ。さ、座れよ!」

ラディは、気にせず店内に進み木でできたイスに座る。

オドオドとイスに座るマリアス。

こっちでは、食堂と酒場は兼業なのかもしれないと私も渋々イスに座る。

注文はラディに全てお任せ。

運ばれてきた料理はとにかく旨い。

正直、城の上品な味付けの料理より美味しいよ。

「な?うまいだろ?」

うんうん頷く。

唐揚げみたいな鶏肉もメツチャおいしー!

「マリオもたくさん食べてね!」

さっきから見るとマリアスって、どこの女子だったくらいに食が細い。



しかも、この唐揚げなんて1コも食べてないじゃん。

「このお肉美味しいよ。ちよつとでも食べてみない？」

「……………じゃあ、食べようかな……………」

多分、お腹いっぱいいっぽいけど、マリナスはそれでも断らないで食べて

くれようとする。

よし、最後の1コだよ。

私が、マリナスの取り皿にその唐揚げを取ろうと持ち上げたその時。

「ふざけるなっ！誰がそんな事、信じるか！」

隣の席の男が同席していた男に掴みかかる。

そして、掴みかかれた男と共に私の背中に体当たり。

唐揚げをトングみたいな道具で取り分けようとしていた私は肉共々、  
床に転がった。

「あーっ。ミツキ、大丈夫!？」

遠くでマリナスの声がする。

こ、この野郎……。

私の額に見えない青いスジが入る。

倒れた私をシカトして殴りあう二人の男に、私はブチ切れる！

ゆっくり立ち上がって、殴りあう男の一人、私に当たってきた方の襟首を後ろからおもいつきり引つ張った。

「ぐえっ」

突然、後ろに引つ張られた男からヒキガエルみたいな声が出る。

「あんた達っ！ゆ、許さん！食べ物への恨みは怖いと知れっ！！」

店内に響き渡る大音量で私は叫んだ！

その10。

「ああ〜っ？お前誰だよっ！すっこんでろっ！」

頭に血ののぼったさつき私が引つ張ったヤツが怒鳴る。

関係ないわけないじゃん！

せつかく、せつかく、マリナスが食べるって言うてくれたのにつ！

「あんた達っ！鶏にもマリナスにも謝れっ！！！」

私は、怒鳴る男の胸ぐらを掴みそのまま一本背負いで床に叩きつけた。

次いで、男達のいたテーブルに飛び上がって騒ぎのきっかけになった男に

向かって飛び蹴りをかます。

男は、体を捻ってそれをかわす。

へへ〜んだ、そんなの予測済みだったの。

綺麗に着地して屈んだ状態から男のふくらはぎを後ろから払う。

膝カックンされたみたいになった男の頭部めがけてハイキック！

ドッ

よし。

キレイにはいった!

倒れた男の上に乗っかってマウントポジションを取る。

後は、タコ殴りの刑のみっ。

意識朦朧としてる男なら、細い私の腕でもダメージが与えられる  
だろう。

拳を振り上げた瞬間、強い力でその腕を掴まれる。

「ミツキ!もうやめとけ。」

そんな私をラディが止めに入る。

だって。

だって。

「ほら、マリオだってそんな事望んでない。」

言われるまま、隣の席を見れば、心配顔で泣きそうなマリナスと目  
が合う。

あ………。

そーだよ。

マリナスがこいつらやつつけて喜ぶわけない。

今は、暴力ってゆるんだわ。

うん。

ゴメン。

マリナスにはいっぱい心配かけちゃったね。

「うん。ゴメン。頭冷えた。」

立ち上がってパンパンと服についた埃を払う。

「お店の方、ご迷惑おかけしました。ごめんなさい。他の人達も騒がしく

してすみませんでしたあゝ。」

深々と頭を下げる。

その時の私は、謝る事しか頭になくなっていた。

だから、頭を下げたら結び上げていた髪がおさめられてる帽子が落ちるな

んて事考えてもいなかった。

暴れるまでは、店内に入っても帽子を取ろうとしない不審な客程度

だった視線。

それが、帽子が落ちた事で顔までバツチリご披露するハメになってしまった。

「あつ。帽子落ちちゃった。」

慌てて頭を上げた私に突き刺さる多数の驚嘆の瞳。

「あちゃ〜」

ラディが困り顔で頭をかいている。

うわっ。

めちゃくちゃ注目されてるしっ。

この時の私は、自分の顔の認識をまたもやすっかり忘れていた。

ただ、マリアスがイセバンドールでは女はおしとやかで物静かであるべきって

考えが根強くて、女が剣術や武芸をやるのはいい顔されないって言うってたのだ

けは覚えていた。

あ〜。

軽蔑と迫害の視線だわ。

マリアスまで変わり者の暴力女の仲間だと思われてる。

私はズドーンと肩を落とし、落ち込む。

ホントにごめんなさい。

マリアス、私って教師失格だよ。

その10。(後書き)

お初の方もそうでない方も、ここまでお読みいただきありがとうございます。  
ざいます。

こちらの『美少女』は、もう一方の『さーち』と同時期ぐらいに考えたハナシなんです。よければそちらも合わせて見てやってくださいませ。

で、『美少女』の方は第一話だけ書いてボツにしたものです(ー)

(泣)

モッタイナイ精神でついアップしてしまっただんですが、私に恋愛モノは無理・・・と、続きを書いてはみたものの、結構くじけ気味です(泣)

えっ？恋愛モノだったの？と思われた方・・・すみません。

私の中では、コツテリ王道恋愛ファンタジーなんですっ(笑)

もし、続きを見てやってもらってもいいよなんて方が(そんないないと思いますが)いましたらポチッとお気に入り登録お願いします！僅かでも待っていてくださる方がいるならば・・・いたらないところだけですが細々と続けていこうかなと・・・。





その11。

「とりゃあっ！」

今日も一日が始まって、私はマリアス、ラディと共に朝の練習を始める。

イセバンドールへやってきて5日目の朝。

昨日は初めて城下町へ行って拳げ句の果てにはブチ切れて大暴れしちゃっ

たんだよね。

でもま、私の長所は過去をグジグジ言わないって事で、昨日一日はドン底に

落ちるけど引きずったりなんてしない。

もう、食事中に切れたりしないぞっと思うだけ。

あまりの立ち直りの早さにラディが呆気にとられるのも無理はない。

だっさ。

人生楽ありゃ苦もあるさっって昔の人達だっって言ってるじゃない？

そんなわけで、今日も私からラディは一本とることができない。

ラディの攻撃の癖も大体分かってきたよ。

「もう、元気なんだなあ。昨日はあんなに落ち込んでたのに、あんだ腕だけじゃなく精神まで強いんだな。」

ラディが一本とられたと言うのに笑って言う。

「そんなに昨日ヤバかった？」

私が言うと、ラディはもちろんマリラスまでウンウン頷く。

そっか。

心配かけちゃったかな。

「私、落ち込む時は徹底的に落ち込む事にしてるの。」

じゃないと、直ぐに浮上できないじゃない？」

「……えっ……そんな考え方……した事ない……」

えーっ。

私の方がビツクリするわ。

「じゃあ、辛い事とかあったら何日も引きづらないといけないの？」

逆に私はマリラスに向かって問う。

マリナスは、じっと私を見て、それからゆっくりと口を開く。

「僕には、そんな事できないです。そうあるとしても難しいかも・  
」

「それは違うよ。今まで辛かったり悲しかったりした時に泣くのを  
我慢したり、

聞き分けがよかったりしたからだと思う。

今度何かあった時には、人前だろうと関係なく泣いてみたら？

浮上せざるを得なくなるからっ。」

久美ちゃんから言わせると、単細胞の一言で済まされちゃうんだけ  
どね。

マリナスの部屋。

突然訪ねてきた私にマリナスがアワアワしている。

「今日も町へ行くことと思うの。」

「えっ……ほ、ホントに？」

懲りずに私が言うのをマリナスがびっくりしている。

まあ、昨日の今日でよくまた行く気になるなって感じなんだろうけど、

だって、昨日はあのまま直ぐに帰ってしまったから、町の様子だってあんまり見れてないんだよ？

やっぱ、国を治める人間は庶民の生活を知ってそれを反映させていかなきゃダメだよ。

マリナスも町の人達がこーゆー事に困ってるって知らなきゃ。

水戸黄門みたいに悪をとっちめたい！

って要は私、ヒマなのよ。

「マリナスだって、仕事してないんだからヒマでしょ？」

私は勝手に決めつける。

「い、いや……私も毎日……ヒマなわけでは……」

「ねっ。行くっ？」

天使もかくやという笑みを浮かべてマリアスを見る。

言葉を無くすマリアス。

ニッコリ。

行こう？

「・・・はい。わかりました・・・」

盛大な溜め息をついてマリアスが頷く。

今日はラディは仕事だから二人で行こうとしたらカルダスさんが慌てて

ラディも連れて行くように言う。

急遽呼ばれたラディはまたもや驚く。

「ほんっと、あんた変わってるな。」

「そう？」

「深窓の姫君は、庶民の暮らしにそんな興味ないぜ？」

「あら、それはもったいない。人生損してるわ。」

「じゃあ、行くか。」

「マリアス、行くわよ！早く着替えて！」

「は、はいっ。」

マリナスは昨日買った服を隣の部屋で急いで着る。

ほら、やっぱり私の見立てに間違いはなかったわ。

着替えてきたマリナスは、町行く女の子達が振り返って見たくなるくらい、いい男度が上がっている。

「お。あれ、おかしいな。王子がかっこよく見える。イテッ！」

失礼な事を言うから、私はラディの脛を軽く蹴る。

褒めてんのそれ！？もっと褒め殺しなさいよ。

「マリナスは、もっと自分に自信を持っていいと思うの。

さあ、行きましょー！」

三人は昨日と同じ城下へと続く道に行く。

その12。

「わあ。賑わってるねえ。」

昨日は服を買うのに夢中で町中をプラプラして見る余裕もなかったから

今日は買い物はしないぞと心に決め、私は町へと足を踏み入れる。

町並みはデイズニーシーみたい。

ヨーロッパなカンジ。

水の都ではないのか、町中を小さな川があったりとかはないけど、レンガ造りの建物が軒を連ねている。

しばらく歩くと市場ってゆーかバザールって表現がピッタリくる場所へ。

賑わいは人を呼び、商品と呼ぶ。

きつと、この世界でも有数のマーケットなのかも。

「すごい人の数だわ。」

「だろ？このカリムバザールは、イセバンドールで最大の市場で、

ここで手に入らない食材は無いと言われてるんだぜ。」



へえ〜。

やっぱり。

イセバンドールは、栄えてる国らしい。

人々の表情も皆明るい気がするし。

マリアスのお父さんが治めてる国。

将来マリアスがそれを継いで繁栄させていかなきゃいけない国。

私には分からない重責だわ〜。

「ねえ、マリオはカリムバザールに来た事ある？」

「い、いいえ………」

「じゃあさ、今日はラディに案内してもらって町中の道を覚えようね。」

「は、はい。」

「おしっ！任せとけ！」

ラディが胸を張って前を進む。

マリアスを挟んで最後尾に私。

マリナスは、下を向いて顔を上げようとしない。

「足元ばかり見ちゃだめだよ！地面はどこにいたって見れるでしょ？」

後ろから私は、マリナスの猫背な背中を手加減して叩く。

「・・・はい」

渋々、顔を上げるマリナス。

ラデイが観光ガイドのように説明するのを聞きながら、しばらく歩く。

チラチラと私達に向けられる視線。

わ〜。

やっぱりマリナスって、こっちの基準でもイイ線いつてるんじゃない？

ほらっ、今だって若い女の子達の3人グループがすれ違いにマリナスを

すっごい見てたもん。

私はマリナスを抜いてラデイの隣に行く。

「マリオってさっきから注目的じゃない？」

私はラデイに話しかける。

ラディは隣の私をまじまじと見た後、はあく軽く溜め息。

な、何よ？

「・・・注目されてるのはマリオだけじゃないんだがな・・・。」

「あく。そーだね。ラディだって美形な部類に入るもんね。」

そーだよ。

ラディは、騎士なだけあってガタイも逞しいし顔だって男らしい爽やか系

が好きな人にはたまらないのかも。

「いや、まあ、俺がカッコイイのは置いといてだなあ。お前もだよ。」

ん？

私も？

何が？

「ミツキの男装もなかなかのもんだってことさ。」

「そーかなあ。だって私、男らしさ無くない？マリアスもないけど、

背は高いから男って分かる。けど私は、チビだしさ。」

二人のおまけ程度だよ。」

うんうん。

茶髪ガテン系スポーツマンのラディ。

金髪キラキラ王子のマリアス。

チビで女みたいな顔立ちの男装してる私。

うん。

一番目立たない。

その13。

しばらくした後、私の目に飛び込んできた建物。

「わあ！大き〜いつ！」

世界史の教科書でしか見たことないような建物だわ。

「ここは闘技場。来月にはここで半年に一度の格闘大会がある。」

ラディが言う。

え。

格闘大会！？

すっごい出たいなあ。

きつと目標あるほうが私の練習もやる気が増すよ！

「ねーねー、ラディ。私もこの大会出たいなあ〜」

「ダメだ。」

ラディから間髪いれずに否定される。

な、なによう。

「誰でも出れるんでしょ？女はダメって事？」

「そつだ。」

「え〜っ。ひどくない?!」

「何が？ミツキだって、俺と単純に力比べだったら勝てないのは分かるだろ？」

大会に出たら女だからって手加減するヤツはいないんだぞ。」

それは分かってるよ。

私だって怪我するのは覚悟の上だよ。

毎朝ラディに勝てるのは、素手での勝負限定だからなのも分かってる。

この世界は制約が多い気がする。

渋々、闘技場を後にした私達・・・とゆーか私は、半分くらい不貞腐れ

ながら歩く。

ラデイのケチっ！

あっと言う間に場所は都心部を抜けて郊外みたいな景色が広がる。

芝生みたいな丈の小さい草が広大な大地に敷き詰められている。

家らしき建物は数えるくらいしかない。

わあ。

私が初めてこの国に来た場所と似てる。

でもあの時は町なんか通らなかつたよ？

「ねー、マリナス。この景色、私が寝てた場所と似てる気がするんだけど……」

周りに人がいないので、私はマリオと呼ぶのをやめて振り返ると

マリナスがビクツとする。

やだ。

何でそんな怯えてんのよ？

私、何もしてないよ？

「えっ、あつ、こ、ここは・・・国有地と繋がってるから・・・」  
意味が分からない。

マリアスの説明は時々、はしより過ぎなのよね。

私の疑問を引き継ぐ形でラディが口を開く。

「元々、この平野は辺り一面全てそうだったんだ。

そこを開拓して町や城ができたわけ。

だから城の裏手には平野の続きが広がってる。

国有地は城の裏、まあ城の庭みたいなモンだな。」

ほゞ。ナルホド。

そりゃ似てるわね。

じゃあ、もっと開拓すればいいのに。

この辺り、住むには悪くないと思うのに。

「なんで、町をもっと広げようとしなのかしら？」

「そりゃ、今までここが戦場になる事が多かったからじゃないか？

歴史が風化すればこの辺りにも家がもつとできるかもな。」



「戦場？」

「ああ。現王になってからは、割りと平和だが、その前には結構争いが

絶えなくてな。国外もそうだが、国内も不安定な頃があったんだ。

友人、知人の血が染み込んだ場所に家を建てたい物好きは少ないな。

」

戦争…。

教科書やテレビを通してしか知らない戦争という響き。

イマイチ実感は湧かないけど、そーゆーわけね。

戦争の悲惨さは実際見たことなくても、人がたくさん死んだ場所って分かってる場所に私も住みたくはない。

「じゃあ、あそこにある家はそれを知ってて住んでるのね。」

私が話をきいてから気になってたのは、平野の中ポツンと建つ建物の存在。

あそこに住んでる人がいるのかしら？

「あ。あれは、孤児院だ。町中には建てられないからな。」

「孤児院……。なんで町中はダメなの？」

ラディは言いにくそうにだんまりしている。

マリアスも知ってるのかな？

「ねーねー。マリアスは知ってる？」

マリアスに話を振ると、またビクツとされた。

もう、何なのよ。

「こ、こ、この町で孤児は・・・生活・・・できないんです」

「だからっ！それは何ですよ？」

「あっ・・・うっ・・・」

「ミツキ、マリアスをいじめるなよ。説明は俺がする。」

ラディの重い口が開く。

「ここまで露骨なのは、この城下町だけだが、イセバンドールでは

孤児は国民として認められていない。」

えっ。

ラディの口から出た言葉に私はとっさに反応できなかった。

国民として認められてないって・・・どーゆー事？

「つまりは……だ。孤児は、ペットや家畜と同じって事だ。」

「はあ？人間が家畜と同じって……何なの。」

「国民として認められてないから孤児は町には住めない。」

住んだら不法入国って事で場合によっては罰せられる。」

「なっ……な、何でそんなんで罰せられなきゃ行けないのよ。」

「不法入国は立派な犯罪だぜ。」

……ただ、俺も正直納得いつてない。

孤児は歴史の犠牲者だからな……。

とまあ、感情は置いておいて。行ってみるか？」

ラディの突然の問いにマリナスは飛び上がらんばかりに驚く。

つてか、震えてない？

「人……無理……」

泣きそうだ。

大人、子供関係なく人が苦手なんだ……。

「やめとくか？」

「ううん。行く。行きたい。」

咄嗟に答えた私。

だって、行きたいんだもん。

マリナスには可哀想だけど。

「マリナス。そんなにつらい？建物の外にいてもいいよ？」

私がマリナスに言うとラディが即答で却下する。

「それはダメだ。俺は二人の護衛だって事、忘れてんだろっ。」

別々じゃ守れない。」

あ、そーか。

私はマリナスを見る。

「い、行きます……。」

マリナスが私の行きたい光線を受けて返事する。

「ごめんなさい。けど、私この国の事をもっと知りたいの。」

いいことも悪いことも……で、私でも何かできる事があればいいなあと思う。

「ミツキが・・・行きたいなら・・・」

マリアスの頑張りを無駄にはしないよ。

「行こう。」

私はマリアスの手を繋ぐ。

頑張ろう。

大丈夫。

私やラディがついてるよ。

ラディの後を私とマリアスがついて行く。

## その14。

近くで見ると孤児院はこじんまりしていて、町から見えない方に入口がある。

庭には洗濯物がはためいている。

幼い子供達が3人遊んでいる。

3人は私達の姿に気づくと、慌てて建物の中へ逃げてしまった。

あゝ。

ちょっと待って。

「シスター、クリリアはいるか？」

建物の扉を叩いてラディが叫ぶ。

反応はしばらくしてあった。

中から出てきたのは、50くらいの女性。

「私に用とは、どなた様でしょうか？」

落ち着いた声でラデイがクリリアと呼んでいた女性が言う。

「俺はイセバンドール騎士団所属のラデイと言う。

様子を見てくるように団長から言われたんだ。」

「まあ、イスカ様が。それはありがたいわ。さあ、入ってちょうだい。」

クリリアさんは団長の名前を出した途端、にこやかな笑顔で私達を招き入れてくれる。

「イスカ様はいつも私達、孤児院に寄付や労いの言葉をくださるの。」

へえ〜。ラデイの上司って会った事ないけど、すごくいい人みたい。いつか会ってみたいなあ。

「イスカ団長は俺と一緒に子供好きだからなあ。」

ラデイの言葉に私は意外な驚き。

ラデイって子供好きなんだ!?

「子供好きなんて意外だね。」

「・・・ラディは、子供だけには優しいって・・・」

私のつぶやきにマリウスがヒソヒソと答える。

「そのの二人。人聞き悪い事言うなよ。」

俺は惚れた女にだって優しいぞ。」

マリウスと私はお互い顔を見合わせクスリと笑う。

「そちらの方は？女性？よねえ・・・」

クリリアさんの視線は私を見ていた。

「はじめましてクリリアさん。」

私は急いで帽子をとる。

結わえていた髪が肩にかかる。

「まあ。素敵なお嬢さんだこと。」

クリリアさんはそう言って私を抱き締めた。

なんかクリリアさんって落ち着くかも。

抱きしめられただけなのにすごい包容力のある人なんだって分かる。



「シスタークリリア。あなたが今抱きしめている女性はミツキ。で、こっちの挙動不審なのがマリオ。」

人と接するのが苦手なだけで害はないから気にしないでくれ。」

マリアスはクリリアさんに抱きつかれるのが怖いらしく、

私に近づいてきたクリリアさんから逃げるように後退していた。

「よ、よろしくお願い・・・しま・・・す」

なんとか辛うじて聞こえるくらいの声で挨拶する。

「ええ、マリオ。驚かせてしまつてごめんなさいね。」

さあ、座つて。今、お茶を用意するわ。」

クリリアさんは貧しいんだろうけど、精一杯のもてなしで私達を歓迎してくれた。

部屋の中は表共々、老朽化が進んでいる。

けど、手入れをきちんとやっているから見方を変えれば、

味のある家や家具つてカンジ。

隣の部屋を繋ぐ扉からチラチラとこちらを伺う瞳に私はニッコリ笑いかける。

しばらくすると、10歳くらいの女の子がお盆にお茶を入れて持って来た。

「ありがとう、レア。さあ、皆さんどうぞ。」

レアって名前らしい女の子は、シラキと同じ赤い髪をしている。

心無しかシラキに似たレアに私は親近感。

「ありがとう、レア。レアと同じ赤い髪の素敵な女の子が

私の周りにもいるよ。」

つい試してみたら、レアは目を真ん丸にして驚いている。

「赤髪が素敵？」

ん？

髪の上にそんなに驚いてどうしたの？

「私は素敵だと思うけど・・・レアは嫌いな？」

クリリアとラディが固まっている。

え？

私、そんな大変な質問したの？

「ミツキ。イセバンドールでは赤は血を連想させる不吉な色なんだ。

」

ふうん。

ラディが言う意味が分からない。

「赤髪の間人は不吉を運ぶと言われている。」

はあ？

ばっかじゃないの？！

そんなワケないじゃん。

たまたま赤髪で生まれただけで、そんな差別の対象になっちゃうの？

信じられない。

「俺にはそんな顔をしてるミツキの方が信じられないけどな。

でも、さすが俺が師匠と仰ぐ女だな。」

ラディは、そう言って笑う。

「ありがとう。おねーちゃん。」

レアも嬉しそうにはにかむ。

レアの笑顔のかわいさに私はキュンとなる。

無垢な笑顔って、こーゆーのを言うんだね。

私は、レアのいれてくれたお茶を飲みながら、孤児院の事についてあれや

これやとクリリアに訊いた。

それで知ったのは、現在この孤児院にいるのは幼い子供12人で、大人は

クリリアと男性が一人。

町へは大人二人しか入れなくて、クリリアは町の教会や城へ行き聖職者として

働き、もう一人は町で肉体労働をしたりして日銭を稼いでいるそう。

一部の人は寄付もしてくれるけど、生活はとても苦しいものらしい。

15歳になったら孤児達は院を出なければならず、大抵は地方で働くそう。

城下は、孤児に対して決して優しい場所ではないから。

けど、何でそんな場所で孤児院をやっているのかと聞けば、地方ならば

孤児を引き取って育ててくれる人が割りといららしい。

それに対して、城下に住むには貴族の認証が必要なのだそうで、出所の不明な孤児の後見を務めるような物好きな貴族はほぼ皆無。孤児の救済が一番必要な場所なのだ。

城下は、後見制を取り入れた事により、犯罪が他の地方より極端に少ないらしい。

自分が後見し、認証を出した家から犯罪者が出たら後見をした貴族にも

刑罰があるからで、認証を受けた家も例えばチンピラ紛いになった子供

などは城下から地方へと追放みたいにして、城下で自分の家系から問題児が

出ないようにするんだって。

本来は町の治安維持の為の制度が孤児達を苦しめる結果になっているのは

皮肉なもの。

王様だって、孤児をいじめる為にわざわざこんな制度を作るわけない

思っのよね。

うん。

今の私に何ができるかな？

制度をなくすなんて大それた事を考えてるわけじゃない。

けど、レアの笑顔がまた見たい。

## その15。

認証制で身元確かな者だけで成り立つ国の問題点のひとつが剣士などの

闘いを生業とする者が少ない事。

だから、半年に一度格闘大会を開いて上位になった者を城が雇う。

そして優勝した者には、100万ウエラという大金がもらえる。

ラデイが、私が大会に出るのを止めたのはそれが理由。

大金や城での安定した収入を得られるチャンスに女だからって手加減する

わけもないって事。

大金のある一週間だけは認証がなくても城下町に入れるから子供達は楽しみ

にしているのだと言う。

子供だもん、にぎやかな場所を見てみたいという好奇心を抑える事なんてできない。

大会には騎士は出ちゃ行けないって決まりは無いけど、騎士に登用するのが

目的のところはわざわざ出てどーするんだって考えがあるらしく、

ラディは一度も出た事ないんだそう。

「あら、お金だけもらっちゃえばいいのに。」

「ミツキ・・・嫌味ではなく、言うておくが・・・」

ラディは、呆れ顔。

「ん？何？」

「俺もマリオも・・・はつきり言って、金で苦労した事はない。

・・・つまり、そーゆー事だ。」

金が必要なワケでもなく、騎士に登用してもらえらってゆー特典も無用。

そりゃ、出る意味ないかも。

「なるほど。」

「ま、ミツキだって金で苦労した事なさそうだな。」

なにおうっ！

日本の母子家庭に育った私を、貴族と一緒にしてもらっちゃ困るわ。

「ウチだって、父親いないから貧しかったわよ。」



「えっ。そーなのか!？」

失礼なラディはともかく、マリオまで驚いている。

けど、母親の明るい性格のおかげで悲観的にならずに生活してたし、私が中学生になった辺りからは、母は雑誌やテレビで紹介されて有名になったから金銭面での心配はほとんどなくなったといってもいいんだけどね。

「母や私の大切な人を守るようになりたかった。

だから、色んな武術を習って……武器は手に入れられ

ないってのもあったけど、どうしてもパワーがものをいうでしょう。

その点、柔道とかは体格が違うなら違うなりの闘いができるからね。

ラディだって、素手では私に苦戦してるでしょ？」

「まあな。」

「クリリアさん！私達にできる事で何かお手伝いできる事ってありませんか？」

大会から話を元に戻して私はクリリアさんに言う。

「そうねえ。時間の空いた時にはここへ来て子供達に色々な話しをしてあげてほしいわね。この子達は年に数回しか町へは入れない。

後はずっとこの平原での暮らしだから……。」

「分かったわ。レア、また来るね！」

「うん。おねーちゃん、また来てね。」

レアが笑顔で見送る中、私達は城へと戻った。

それから、私の日常にレアの笑顔を見る事が追加された。

その16。

久美ちゃん。

お元気ですか。

まだそちらの世界には帰れそうにありません。

寂しく思う事もあるけれど、私は元気です。

最近ほぼ毎日、私は孤児院に通いまくってるよ。

目的は、レアって言う赤髪の笑顔の可愛い12歳の女の子なんだ。

久美ちゃんに負けず劣らずの可愛いさで、久美ちゃんの地位が危ないよ。

けど、久美ちゃんならきつと

「あんたのストーカーがかった愛情なんて、レアって子に譲るわ。」

なんて言うのかなあ。

久美ちゃんの冷たい対応が懐かしいよ。

いつになるか分からないけど、私絶対に元の世界に帰ってみせるよっ！

だから、信じて待っててね。

「レア！！あ、あれ、いないの？おじやましますよ〜！」

いつもなら院の外で他の子供達の面倒をみたり、シスターの代わりに家事をやってるはずのレアの姿がない。

私は、マリアスと互いに顔を見合わせる。

ここ数日、ラディの勤務が終わってからの夕方に私達三人は孤児院へと

通いつけている。

3日目には、ようやくマリアスもクリリアや子供達から抱きつかれても、

逃げ出さなくなった。

会話するのはまだ、難しいみたいだけど、返事はできるから進歩だよね。

院の中へ入る。

レアより小さい子供達が11人いた。

「レアは？奥にいる？」

私が入ってきた途端、子供達の目にこらえていた涙があふれる。

「ミツキねーちゃん！レアがつ！」

「えっ？」

「レアが！倒れたんだよ！助けて！」

伝染したみたいにみんなが泣きだす。

「ちょ、ちょっと！ワケが分からないわよ！レアは？奥にいるの？」

子供達が頷くのを見た私達は、奥へと続く扉を開ける。

中は薄暗く、大人二人とベッドで寝ているレアの姿があった。

「まあ、ミツキ。来てくれたのね。」

クリリアさんが悲しみに彩られた顔に無理矢理笑みを浮かべた。

いいつて。

こんな時までクリリアさんは、私達を温かな笑みで包み込もうとする。

そんな場合じゃないと、私はクリリアさんの元に行くと眠るレアを見た。

「レアは大丈夫なの？お医者さんにはみせたの？」

私が言った言葉に答える者はいない。

あれ？

どうして誰も何も言ってくれないの？

「ミツキ、認証を持っていない人間は、医者にかかる事はできないんだ。」

ラディがクリリアさん達の代わりに答える。

そんな……。

じゃあ、レアはこのまま寝てよくなるのを待つしかないの!？

「ミツキ……外へいかしら。」

クリリアさんが、私達をそつと外に促す。

外へと出た私達三人にクリリアさんは口を開いた。

「レアは、元々体が弱い。私達も何とかレアに治療を受けさせてあげたい

のだけれど、認証を出すには貴族の後見とお金も必要なの。

決して安くはないお金をレアだけの為に使うわけにはいかないのよ。

・・・ずっと昔にここを通りがかった親切なお医者様が言うには

レアはおそらく成人できないって……………」

なっ。

レアが、死ぬかもしれない？

嘘だ…。

だって昨日までピンピンしてたじゃない。

それが何で？

私は突然の宣告に言葉をなくす。

貴族に認証してもらって…………。

あ。

そーだ。

「ラディ！マリアス！二人なら・・・レアを認証できるんじゃないの？」

私は希望を込めて、ラディとマリアスを見る。

「えっ・・・あっ・・・ミツキ・・・」

「マリオのトコは、無理だ。俺のトコもやってみるが

・・・厳しいと思う。」

なんでよ?!

「ここでは何も答えられないからな。後でゆっくり話してやる。

とりあえず・・・ミツキ達は帰れ。

シスタークリリア、俺の家の者に後で薬をいくつか届けさせる。」

「はい。ありがとうございます。」

クリリアは頭を下げて院へと戻って行く。



帰り道。

「どーして、認証できないのよっ!？」

私は怒りを込めてラディに食ってかかる。

ラディは無言。

マリアスも無言。

もうっ!

城に帰るまで話さないってわけね。

私達は無言で城への道を急ぐ。

城内、マリアスの部屋。

ソファアへ腰をおろした私達。

カルダスさんに部屋から出ているように申し付けて今、

部屋にいるのは私達三人だけになっている。

「俺達が認証を出せない理由。・・・マリアスのトコは王家なワケだ。」

イセバンドールでは最強の後見人だが、いつマリアスの王位継承の障害

になるか分からない。」

「障害？」

どーゆー事？

「マリアスは、他の王位継承権のあるヤツから命を狙われる危険がある。」

例えば・・・レアを人質にとられたらどつする？」

あ。

どーしよじっ？

そもそも、命を狙われるって……。

「だから、マリアスに認証させる事はできない。

それから俺の方だが、俺は認証をしても構わないが、

家にまで責任が及ぶ決定を俺だけの判断ではできない。

そして、レアの事を何も知らない人間が孤児を認証するのに賛成すると思うか？」

「病気の人間を助けたいって思わないってゆーの？」

「助けたいさ。

けど、一度それをやったら病気の孤児を全て認証しなけりゃならなくなる。

レアだけを認証するには、それなりの名目がなくちゃな。」

「そんなぁ……」

どうしたらいいんだろう。

私は頭をかかえる。

どうしたら、レアを医者にみせられる？

いつまでもレアには笑顔でいてほしいのにつ！

「……ミツキ……は……レアの事……」

何をしても……助けたいの？

……医者にかかっても……助かる……分からない……」

今までずっと沈黙を守っていたマリアスが口を開く。

全く感情の入っていない表情。

なぜか、いつもみたいに強気に出る事ができない私は、

それでもしつかりと頷いた。

私、レアを助けない。

それを見たマリアスが頷く。

「……分かった……レアに……医者……」

今から……言う事を……」

マリアスは私達に向かって話を始めた。

その16。(後書き)

一気にアップしてみました。

本日の午後にもうちちょっとアップしますね。

その17。

「……ミツキは……格闘大会に参加して……」

マリアスが言う。

「えっ? いいの?」

「……何でもやる……ですよね?」

うんうん。

私、頑張るよ。

ラディがマリアスに訝しげな視線を送っている。

その顔には、何て事言い出すんだって書いてある。

「ラディ……は……こっち。」

マリアスがラディに耳打ちしている。

二人は何を話しているのかな?

ってゆうか、マリアスからラディに近づいた事に少し驚く。

今まで私が一緒にいる時にも、積極的にラディと話したり近づいたり

した事ないのに。

あれ？

そーいえば、何でマリナスは私と初対面から話ができただろう？

さすがに全裸の人間が目の前にいたら話さざるを得ないからって勝手に

思ってたけど・・・今のマリナスを見てると・・・逃げるよね？

私は、ヒソヒソと話し合う二人を見る。

ホントにレアを助けられるのかしら？

けど、私はマリナスを信じるって決めた。

最後までちゃんと付き合おうよ。

それから私は毎日の朝練習の時間には、剣を持ったラディに稽古を  
つけてもらっている。

マリナスは、横で私達の様子を見学している。

私の方は、基本素手なんだけど、靴底には鉄板が入っている。

結構重いけど、私がパワーを出せるのは蹴りしかないからそこを強化するしかない。

足が重くなっても身軽に動けないとね。

暇な時間を見つけては手足の筋トレを行っている。

「おりゃあ!」

私の蹴りをラデイが剣の持ち手で他の方向に弾く。

素手の時と違って、ラデイの動きも滑らかだ。

「とりゃあ!」

態勢を変えて今度は下への攻撃。

ラデイの足元を狙った攻撃は好を奏した。

一瞬、バランスを崩したラデイの片足を踏む。

バランスを崩した時、人って立ち位置を変えて再びバランスをとるんだけど、

ふらついた時にとっさに出るはずの足を抑えると大の男でもすんなり倒れる。



例外無くラデイも倒れる。

「どつよっ」

「いや、参った。って、ホントにミツキはすごいな。」

ラデイが感心しきりに言う。

「普通、武器を持った相手の懐に素手で飛び込むのって躊躇いが出る

もんだけどな。」

ああ。

それね。

確かに今でも恐怖はあるよ。

ゼロとは言わない。

けど、レアを助けたい気持ちがあるからね。

マリアスやラデイと仲良くやっても、時折思う。

この世界で、私の存在はどこまでいっても不安定で不確かなものな  
んだって。

異世界の人間。

ここは私のいるべき世界じゃない。

心のどこかで……。

この世界で死んだら元の世界に帰れるんじゃないかってね……。

そんな気持ちも少しあるのかも……。

なんとなく自分の心の中で自己分析してみたり……なぐんて  
ね！

男に負けてたまるもんですかっ！

体が大きいからって勝てると思うなよっ！

そして、いよいよ大会当日　　。

その18。

レアを医者に見せるとミツキが決意した日の夜

ラディはマリアスの部屋へとやってきた。

先程、マリアスはラディに後でミツキに知られぬように部屋へ来るように

耳打ちしたのだった。

「マリアス王子。さっきはなぜ、ミツキに大会に出るように言ったのです？」

出てもしも、傷跡が残ったらどうするんです？」

入ってきた途端、ラディは前置き無く本題に入る。

マリアスは無言。

机で熱心に何かを書いている。

その紙を三つ折りにし、封筒に入れ蜜蝋で印を押す。

一段落したのか、筆を置いたマリアスがカルダスに顎をしゃくる。

カルダスはそれだけで理解したらしく、ラディに向かってお辞儀した後、

口を開いた。

「今夜、あなたはマリナス様とは会っていない。そう、お考えください。」

質問には、一切答える気はないですし、話しが終わったら挨拶無しで退出

くださる様、お願いいたします。」

訝しげな表情をしたラデイだったが、分かったと頷く。

「ラデイ様、こちら側のソファーにお座りくださいませ。」

決して振り返る事のないように。」

カルダスが差し示したのはマリナスに背を向けた位置になるソファーに座る。

ラデイはカルダスに言われるまま、マリナスの姿が見えないソファーに座る。

「・・・カルダスも・・・席・・・外して・・・」

「承知いたしました。」

そう言ってカルダスは部屋から出て行く。

沈黙。

なかなかすぐに話し出さないマリウス。

時間にしたらおそらく1分程度なのだが、

ラディにはとても長い1分に思えた。

いらつくラディ。

しかし、次の瞬間驚きに目を見張る事になる。

「私はミツキに、何をしても医者にみせたいかと訊いた。

そして、ミツキはみせたいと言った。ならば、多少のリスクは覚悟せねばな。」

マリウスがスラスラと言葉を発する。

思わず口を開きかけたラディだったが、カルダスの言葉を思い出し、口を押さえる。

「ミツキには、大会に出て予選を突破できる程度に稽古をつけるよ  
うに。」

目的は優勝じゃない。

本選にさえ残れば、適当なところで負けてもらって構わない。

しかし、それはミツキに言う必要はない。

それから、ラディの父上にこの封書をそのまま渡してほしい。

話は以上だ。」

それだけ言うとマリウスは座っていた椅子をクルリと回し、

ラディと背中合わせの状態になった。

ラディは無言のまま立ち上がり、机の上の封書を手に部屋を出る。

扉の外に立つカルダスと目が合う。

「マリウスは・・・人と向かいあわなければちゃんとしゃべれるんだな。」

「・・・知らなかった・・・」

「ええ。人とコミュニケーションさえとれば・・・」

マリウス様ほど王に相応しい方はいらっしやいません。

「・・・私とラディ様、そして現王しか知る者はありませんが・・・」

そう、ミツキやマリウスとあんな切っ掛けで出会わなければラディだって

世間一般で言われている通りの人物像しか持たなかった。

『白痴王子』

人前に出せないくらいに知恵遅れで無能な王子。

催しにも一切出ず、部屋に籠っている事がほとんどで、

学生時代も部屋にやってくる教師達と意思疎通がとれない為に

劣等生扱いだったというマリナス。

けれど、ミツキがいる場所ではたどたどしくはあるが会話が成り立っている。

それは、驚くべき事　　。

ミツキはおそらく知らないだろう。

カルダスが素性も分からぬ人間にどれだけの希望を見出したのかを　　。

ラディが去った後の部屋　　。

闇夜にガラスを通して写し出される自分を見つめながら、

マリナスは誰にも聞こえない程の声で呟く。

「・・・・・・な・・・ければ・・・」

けれど、それを聞く者は誰もいない。  
。



その18。(後書き)

ここまでお付き合いありがとうございます。

なかなか話が進んでいきません(――)

国語力を上げる為にはどうしたらいいんでしょうかね？(現状、思  
いっきり理数系なんです(――))

追記。

途中、表現上に差別用語がありますが、世界観上のものとしてお考  
えくださいませ。

その19。

とうとう大会当日。

よし、頑張るぞ！

シラキに作ってもらった衣装は男装ではなく、

女性らしさを全面に出した赤いワンピース、下は黒いレギンスみたいな

動きやすいズボンタイプにもらった。

髪は動きやすいように一つに結わえて、顔はウォータープルーフな化粧品が

ないので、スツピンに近いナチュラルメイクのみ。

会場に入ると皆の視線が一齐に私を見る。

うわっ。

浮きまくり〜。

少しくらい女性がいるかもなんて想像してたのに・・・見事に私だけじゃん！

待機会場には、37人あまりの人達が集まった。

「クジを一人一枚引くように！」

係員の人が叫ぶ。

あ。

まだ私、引いてないや。

ちょっと待って〜！

私は係員の元へ走る。

多くの人間が見守る中、数字の書かれたボールを箱からひとつ取る。

私が引いたボールはピンクの球で10と書いてあった。

おお〜っ！！

会場から沸き上がる声。

えっ。

なんか変なの引いたの!?

「ミツキミヤキさんは、シード選手となりますので予選一回戦はありません。」

「二回戦からの参加となります。」

係員に言われて納得。

やったね！

一試合、楽しちゃった。

予選は一般の人は見る事ができない室内で行われている。

私はいきなりヒマになってしまったので、係員の人に少しの間だけ外に

出てもいいか聞く。

だってさ、闘技場の待機会場には女性用のトイレがないんだよっ。

しかも、舐めるような男の視線にずっと晒されてるのもしんどい。

なんか、日本にいた時には女の子らしい女の子に憧れてたけど、

実際なってみるとあまり良いことがない。

やっぱり可愛い女の子は見るに限る。

見て触って抱きしめたい！

女の子の柔らかな肌に顔をうずめたい。

うっっ。

最近、レアは体調を崩してるから抱いてないしな。

シラキは会う度に、抱きしめてるけどさ。

レアみたいに毎回喜んでくれないからなあ。

そんな事を待機会場途中にある椅子に座って下を向きながらうただと

考えてたら私の前に立つ人影。

私は妄想を邪魔されて不機嫌になりつつ顔を上げる。

誰よ!?

「試合見ないのか?」

「あら、ラディ。なんであんな、ここにいるのよ?」

「ひつでえ。あんたが試合に集中できるようにマリオの命令で参加してんだよ。」

あれ、だってラディは既に騎士だし金持ちだから出ないって言ったのに。

「マリオが出るってゆーなら出るさ。あ、一応騎士なのは内緒だからな。」

「ばれたらカツ」悪いから言つなよ。」

笑顔で告げるところをみると勝ち抜けてるらしい。

ま、ラディって現役騎士なわけだから、こんな予選で負けるわけには  
いかないだろうけど。

「しかし、お前会場でメチャクチャ目立ってたな。」

「えっ？そお？女だからじゃん。」

ラディが何度目かの溜め息。

「別々に来てよかった。余計な恨みは買いたくないからな。」

会場にいた半分くらいのヤツは、お前に惚れたな……。」

はあ？

何それ。

会場にいる他の選手達とは話だっしてしないようにしてるのに。

「お前、自分の容姿にホント無頓着だよな。」

あー。

なるほど。

そーいえば、今の私って格闘とは無縁な可憐な容姿をしてるんだよ  
ねえ。

私だって、今だに鏡見るとビックリするもん。

でも17年付き合った顔が急に変わったからって、中身が変わるわけじゃない。

久美ちゃんに散々、ガサツと言われ続けた私。

急におしとやかになれって言われてもね……。

まず無理っ！

「二回戦が始まります!!」

遠く係員の叫ぶ声。

「あ！私、二回戦すぐなんだった！じゃーねっ！」

がばつと立ち上がった私はラディに手を振り会場へ急ぎ走る。

遅刻だ遅刻っ！

不戦敗はやだよ！

会場に戻ると早速、私をコールする声がある。

はいはいー！

ここにいまーす！

死にももの狂いでダッシュ。

ちよつと会場、広すぎだよ！

たどり着いた時には軽く息切れ。

既に舞台には私の対戦相手である20代そこそこの男の姿があった。

「勝負はこちらの舞台から落ちるか、相手がまいったと言ったら決まります！」

では、始めっ！！」

私の対戦相手は、剣を構えた。

頭以外は甲冑に身を包んでいるんだけど・・・重いらしくヨタヨタしている。

細身の体に甲冑が合っていない。

特に特徴の無いのっぺりした顔に、いやらしい笑みを浮かべて私を見る姿に鳥肌がっ！

ばっちり目が合う。

やだ。

キモイっつーのっ！

開始と同時に私は相手に向かって走る。



相手の至近距離ギリギリで左足を軸に方向を変える。

「逃げるの・・・かつ・・・」

しゃべろうとした男の頭部めがけておもいつきりハイキック！

最後まで言えずに男は舞台から落ちた。

「勝者、ミツキミヤキ！」

おっし！

滑り出しは好調。

やっぱり、靴に鉄板をしこんでて正解だわ。

実は、この世界で私はラディとしか特訓してなかったから、

今の自分がこの世界でどれくらい的位置にいるのかよく分かっていなかった。

後々分かったのは、ラディはイセバンドールでも指折りの実力者で、そのラディと勝ったり負けたりを繰り返した事により、私は知らず知らずの

うちにメチャクチャ強くなっていた。

まあ、どれくらい強くなっていたかと言えば……。

えへへっ。

本選の決勝まで残っちゃいましたっ。

本選は、闘技場の広場で行われている。

ここは観客席もあって、大勢の歓声に埋め尽くされている。

予選の合間に、ラディから大会の本選はマリアスの父親

。

つまり、現国王さまも観にきてるって聞いた。

「マリアスは観にきてくれるのかなあ？」

「ねーねー、マリオは来てるの？」

「ラディに訊く。」

「本選に余裕で残ったラディは首を横に振る。」

「こんな人の多い場所にマリオが来ると思うか？」

「・・・だよねえ。聞いた私がバカだわ。」

「それより・・・まさかミツキが決勝まで残るとは思わなかった。」

「先生がよかったからね。」

「私が言つとラディがニヤリと口の端を持ち上げた。」

「じゃあ、師匠をたてて次負けるよ。」

「私もニヤリとする。」

「やーよ。師匠なら前途ある弟子に勝ちを譲りなさいよ。」

「やなこった。」

「そう、次の決勝戦は私とラディの対戦だったりする。」

「どっちが勝っても賞金はレアの治療費に使うから問題ないんだけど。」

・・・

ラディに負けるのは何かヤだ！

ラディの方も騎士団在籍の意地がある為、ワザと負ける気はないらしい。

レアに感謝のキスをもらうのは私なんだからっ！

その19。(後書き)

ここまでお読みくださってありがとうございます。

今だラブストーリーのラの字も出てこないです。

亀の歩みの二人を長い目で見守っていただけとありがたいです m

( m )

その20。

波のようにつねる歓声。

その中心へと歩を進める私とラディ。

仲間とか目的が一緒なんて事は知らない。

互いに強さを求める者同士。

ただそれだけ。

ラディの顔つきが変わる。

剣士の顔。

今までの訓練では見せた事のない顔。

私もそれに応じるように相手を睨みつける。

負けないっ。

「それでは決勝戦を開始します！始めっ！」

審判の声に二人して互いの距離を詰める。

ラディの剣を紙一重の距離で避ける。

服がかすって切れるのも構わず私はラディの剣の死角になる懐に突っ込んだ。

しかし、ラディは持ち手をずらして柄の部分を私の方に向かって突く。

「うぐっ。」

肩に柄の強打をくらい、動きを止められてしまう。

うんにやろっつ！

まだまだだよっ。

私は懐から距離をとって、再び睨みあう。

「あらら、もしかして俺に勝ちを譲ってくれる気になったのか？」

ワザと隙を作ってラディが挑発してくる。

他の参加者は、私の出す技を今まで見たことなく、

更には女という油断もあったから奇襲も好を奏してたけど、

ラディは散々私の技を見まくってるから、なかなか技を決めるポジションに入れてもらえない。

ましてやラディの本職は騎士。

訓練より実戦で本領を発揮するタイプなのだと思った。

「なワケないでしょっ！」

それでも私は、何とかラディに一発お見舞いしてやりたい！

諦めるもんかつ！

「来ないなら、こっちから行くぞ！」

状態を整える隙を与えずラディが仕掛ける。

玉砕覚悟で私はラディの剣先から身を捻り、剣を持つラディの腕に手刀をはなった。

「っー！」

取り落としはしなかったが、一瞬痛みに痺れが走り、ラディの剣が止まる。

それを見逃さず、私はラディの服のベルトを持って一本背負いの態勢に持っていく。

が、勢いがついていない状態からのスタート難を逃れたラディを



足払いで転倒させ、でラディは横に態勢をワザと崩して逃げた。

「あつぶねえ。残念だったな！」

「かかったわね！」

その21。

私の一本背負いから逃れたラディの足を払う。

「おわっ！」

バランスを崩したところを肘鉄かまそうとした私。

が、ラディは素早く側方に転がって私の肘は空をきってしまった。  
しまった！

そう思った時には既に手遅れ。

私の首元に向けられたラディの剣の鈍い輝きが右の視界端にある。

「おらっ、お前の負けだ。」

「・・・勝てそうだったのに・・・」

「ぬかせっつの」

私は、両手を挙げて降参のポーズ。

斬られるのは御免だわ。

「勝者！ラディ！！ウインスター！！」

ウォーッ！！！！

会場を熱気が、歓声が包む。

私達は夢中で気づかなかつたけど、会場は二人のスピード重視の闘いに

息を飲むように静まりかえっていたんだって。

「立てるか？」

ほらよって感じでラディが倒れている私の腕を取って持ち上げる。

「ありがとう。負けたわ。すごい悔しい！」

けど、精一杯やったからどちらからともなく笑みが溢れる。

その後、私とラディは国王直々に良い試合だったという

ありがとういお言葉をいただいたりした。

イセバンドール式の下を向きっぱなしの礼をしたから、

マリアス父の顔ははつきり見れてない。

でも、近づいてくるのを遠目に見た感じでは威厳が段違い。

マリアスにこんな貫禄出せるのかしらと不安になった。

けど……顔はマリアスの方が整ってる。

うん、マリアスは美貌の国王様目指せばいいんじゃない！

貫禄なくったって何とかなるよ！

とにもかくにも、レアの治療費はゲットしたよ。

けど、認証は相変わらず無いままなんだけど……

マリアスの作戦はどうなってるのかしら？

「ラディ！勝ってよかったなあ。」

ラディと二人、城へ戻ろうと歩き始めたところを  
引き留める声が背後からかけられる。

「イスカ団長！来てたんですか?!」

振り返ると、そこにいたのは、28くらい？な黒髪の男性。

ラディやマリアスみたいな断トツ美形ではないけど、

かっこいい部類にギリギリ入りそうな顔立ち。

何より人好きのする笑顔を見せて、イスカ団長が私達の方に歩いてきた。

見た感じ全く強そうじゃない。

けれど、至近距離に立った団長を前に私はゾクリと身を奮わせた。

やだ……。

この人とは闘いたくない……。

絶対勝てない……。

えっ。

今まで抱いた事のない思考に自分で驚く。

当の団長とラディは、にこやかに会話している。

「団長に紹介したかったんですよ。」

こちらの女性は、ミツキって言うんです。」

「あつ。はじめまして。」

慌てて頭を下げる。

「うん。よろしく。こんなだけど、一応団長やってる

イスカ＝リールです。しかし、ラディもすみにおけないなあ。

こんな美人なお嬢さんと知り合いだったなんてさ。

ミンクと交換しない？」

ミンク？

って何？

毛皮とかのあのミンク？

私の頭にハテナが出る。

「ミンクは副団長で女性なんだ。」

唯一の女性騎士だから、そのうち会つかもな。」

ラディの説明に私の瞳が輝く。

きゃっ！

イセバンドールなのに、女性騎士がいるの！？

「ミンクは口やかましいのがたまに傷な女で、俺やラディより弱いぞ。」

この団長って人と比べたら誰だつて弱いんじゃないの？

と思ったけど、どうやら副団長は参謀役みたいなポジションらしい。

確かにこの団長、誰かがしつかりサポートしないとダメそうな感じするし。

そんな事を思われてるとは知らない団長は、

ラディに折り置まれた一枚の紙切れを渡す。

「なんだかラディは楽しそうな事に巻き込まれてんだな。」

ほいよっ。渡したからなっ。」

「何ですか、これ。」

紙を受けとったラディは紙片を開く。

そして静止。

「何って……お前の解雇通知だよ。」

え。

解雇通知？

って……クビ？

私もきよとんとしてしまっ。

ラディを見ると紙を持つ手が震えている。

あ。

これは……。

持っていた紙をクシャリと握り潰したラディは、怒りの形相で叫ぶ。

「あんつの、バカ王子！ふざけんなっ！」

あっという間に、紙を投げ捨て走り出す。

ちよっ、ちよっと待ってよ。





その21。(後書き)

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。

文章力ないんで格闘シーンは適当感がたっぷりです(笑)

あ。人物描写が適当なのはわざとです……。

読んだ人なりの美形基準があると思うんで、髪の毛の長さとか色、身長ぐらいしか大体書いてないはず？

テヌキジャナイヨ！

突発ですみませんの22話 (前書き)

次話のフォロー話とゆーか・・・。

## 突発ですみませんの22話

騎士になって4年と少し。

これはもう習慣といってもいい。

翌日が休みの日の夜の朝帰り。

騎士になってから、女の存在が途絶えた事はない。

女癖の悪さは城はもちろん町の女性達にすら浸透している。

それでも男女の恋愛に理屈は通用しない

。

いつも通りに城内にある騎士の訓練用施設の前を横切って部屋へと向かい歩く。

「マリアス！行くわよ！」

施設の建物から響いてくるのはその場に似つかわしくない女性の声。

「女の声？」

ラディは声に興味を惹かれ、休みだというのに建物の中へと足を踏み入れた。

「マリアスつてば。起きてよ。」

扉を開けて見れば、倒れた男の傍にしゃがんで声をかける女の姿がある。

「あの男、女に伸されたのか？」

状況の通りなら、男が騎士でない事を祈るばかりだ。

女に負ける騎士はマズイだろう。

「朝早くに来てみるもんだな。こんな場所に女がいるとは。」

俺は、女が気付くくらいの声で言う。

がばっと女が俺の方を向いて近づいてくる。

「おいおい……こりゃ……」

女の顔が見える位置までくると、俺の予想は驚愕と共に裏切られる。

今まで見た事ないくらいに非の打ち所のない容姿。

敢えて言うとするなら、幼さの残る顔立ちに首から下の

スタイルの良さが合っていない。

けれど、これは非と言うよりは男を惹き付けて止まない魅力と言っ  
べきもの。

実際俺もそーゆー女は嫌いじゃない。

「女のアンタの体は肉弾戦向きじゃないと思うが？」

・・・まさか、あつちの肉弾戦じゃないだろーなあ。」

俺は、女をからかう様に声をかける。

すると、女はからかわれた事に対して怒ったらしい。

全速力でこちらへと走ってきた。

やっぱり、美人だ。

美人というか美少女だ。

てつきり近づいてきたら止まるかと思っていたら、

止まらず俺に向かって蹴りを放つ。

「面白い女だな！」

非力な女に何ができるといふ油断があったのは否定できない。

すんなり決まった女の攻撃。

まさか、俺が女に負けるとはな。

面白い人間に出会った喜びは、これで2回目だ。

騎士団への入団希望者は、半年に一度ある格闘大会と

直接城へやってきて志願する形式がある。

直接城へやってくる場合には、認証の提示が義務なので、

大抵は貴族や腕に自信のある町民だ。

貴族に縁故の無い者は、大会からという厳しく狭い門を

潜り抜けなくてはならない。

一方の城に志願した者は、ほとんど落ちる者はいない。

イセバンドールでは、入団させてからフルイにかける方針らしく、  
入って一年以内に覚悟のない者は去ってゆく。

貴族だから楽ができるって事はなく、この国にしては珍しく実力主義だ。

俺は、当然ながら城に志願したクチ。

ウインスターの家は男三人兄弟で、家を継ぐ長男は30歳で子供も  
いるのだが、又ボツとした癒し系。

城内でのドロドロした権力争いからは早々に退場してしまい、  
今は地方にある領土でのんびり暮らしている。

それから、細いフレームの黒ぶち眼鏡をかけた神経質そうな

秀囲気の次男は22歳。

城の中の政務局の役人だ。



昔からバカと天才の境目にいるような人間で一言で言えば変わり者だ。

そして、三男の俺。

上の二人とは違い、俺だけなぜか母親似。

その為、兄弟というのを知った人達は口を揃えて似てないと言う。

勉強が嫌いで運動神経だけはいい方だった俺は初等教育終了と

共に騎士団の門戸を叩く事となった。

三男というポジションのおかげで俺は家族から変な期待を受ける事も

なかったのがよかったのかは知らないが、メキメキと剣の腕を上げ

現在では騎士達の間では団長の次に強いという評価をもらうまでになった。

そんな俺があまりの強さに憧れてやまないのが団長イスカ「リールだ。

はつきり言っつてこの団長、剣以外の事はからつきし役にたたない。

生活破綻者もいいところで、つい先日など孤児院の建物が雨漏りするとかで、

給料全額を建物の修繕に使い果たしてしまった。

団長なのに、今だに下っぱは騎士達と同じ共同食堂でメシを食ったりしている。

共同食堂のメシは無料。

旨くもないが腹は膨れるがキャッチコピーの素敵な場所だ。

俺は、新兵から上がった時、真っ先に喜んだ。

新兵の時には強制だったこのメシを食わないという選択肢が増えた事に。。。

喜んで食べてるのは団長ぐらいだろう。

部下に示しがつかないから、自分の部屋で食事しましょうよって話をしに来たミンクに力説！

「タダなのに、もったいないじゃん！

それに俺、家事全般できないし・・・それともミンクが作ってくれるの？」

ぶふうーっっ！！

動揺しまくるミンクに同席していた俺は笑いが止まらない。

ミンクはイスカ団長に惚れている。

本人は隠してるつもりなんだが、周囲にはバレバレ。

気づいてないのは団長本人のみ。

「な、な、何言ってるんですかっ?!」

何で私がイスカさんのお世話しなきゃいけないんですかっ!」

むきになって言うミンク。

「だってさ、俺にコックを雇う金なんてないもん。」

「またですかっ?今度は何に使ったんです?!」

「いや。それがさあ。この間、道を歩いてたら、

私を買ってくれてっていう女が……」

「買ったんですかっ!!」

ミンクがすごい形相で詰め寄る。

おいおい……。

それは、娼婦ってヤツじゃ……。

「ミンクどーした?お前、顔怖いぞ?」

「やかましいっ!買ったの?買わなかったの?」

「買ったよ。なかなか見所のあるヤツだったし……」

ケロリと当然という感じでイスカ団長が言う。

途端、ミンクの顔から血の気が引く。

「見所?! いや〜っ! 不潔ですっ!!」

イスカさんがそんなケダモノだったなんてっ!

見損ないました〜っ!」

うわ〜んっ!

ミンクは脱兎の如く部屋を飛び出して行った。

残された俺と団長。

互いに顔を見合わせる。

「ミンクは何を言ってるんだ?」

「いや・・・俺からすると団長こそ何言ってるんですかなんですが・・・」

「・」

「ん? 絵を買ったのがそんなに変なのか?」

「絵?」

「画家志望で諸国を巡っていると行ってたが・・・金が尽きて倒れてたんだ。」

「それ、ミンクに言った方がいいですよ。」

今のままだと口きいてもらえなくなりますよ。」

「なぜっ?!そんなに食堂で食べるのはダメなのか?」

「違いますから。」

はあ〜。

ミンクもなんでこんな男に惚れるかな。

けど、剣士としての団長は本当に強い。

いくら鍛錬しても、追いついてる気がしないほどに。

いつかは、団長と肩を並べてイセバンドールの双剣と言われない。

俺が出会った人間の中でも、団長の強さと面白さは群を抜いている。

いつまでも共に汗を流し、苦楽を共にできると

この時の俺は、信じて疑うこともなかった。

突発ですみませんの22話 (後書き)

密かに団長お気に入りなんで・・・

いつか、団長のカツコイイ姿も書きたいなと。

今後もチヨロチヨロ登場はしますが、カツコよくはないデス・・・

( - - - )

その23。

大会後、ラデイが怒りを頭にマリアスの部屋の扉を開ける。

ダンッ！！

重厚な造りの扉は、今までこんな扱いを受けた事がないためか、

安木でできた扉のように易々とラデイに道を譲る。

部屋にはカルダスとマリウス二人の姿。

カルダスは、ラデイの突然の訪問にもにこやかな笑みを浮かべる。

一方のマリウスは、ラデイの怒りの顔を見た途端、素早くカルダスの背後へ。

「ラデイ様。大会優勝おめでとうございます。」

カルダスはラデイに一礼をして、例のソファアを勧める。

ラデイはそれを無視してカルダスの背後にいるマリウスに食ってかかる。

「マリウス！お前、一体何を考えてるっ?!」

「えっ……あっ……ど……どう……ラデイ?」

相変わらずのオドオドした態度。

ラディと目を合わせようとはしない。

もしか、あの夜のマリウスはどこぞの替え玉じゃないのかと疑いたくなる。

「解雇通知って、どーゆー事だ!!」

「……ラディ? ……ま……ま……ま……」

「待てるかバカ! 勝手にクビにされておとなしくするわけねーっ!」

今にもマリウスを殴りそうな剣幕のラディをカルダスが制す。

カルダスは年の数50近いにも関わらず、鍛えぬかれた身体で

ラディの腕をすんなり捻り上げて離れた。

「仮にも一国の王子に接する態度ではないでしょう。」

まあ、とにかく座りなさいませ。理由なら私がお話いたします。」

「……分かった。」

カルダスに抑えられてラディは少しでも冷静さを取り戻す。

渋々、勧められたソファに腰を下ろす。

カルダスは召使いの女性を呼び、お茶を持ってくる様に言いつける。



マリアスは、ソファーには座らずいつかの夜のように事務機の椅子に腰を下ろした。

カルダスはラディと向かい合う形にソファーへ座る。

少しして、女性がトレイにお茶を用意してラディ達の前に置く。

女性が去るのをゆっくりお茶を口にしながら待つカルダス。

「さあ、説明してもらおうか？」

ラディが口を開く。

「ええ。何もそんな難しい事はございません。

ミツキ様が、レアという孤児を医者にみせたいと申された事

から始まっております。」

「それは、俺も知ってる。そこからどうして俺が解雇されるんです？」

「では、順を追ってご説明しましょう。・・・マリアス様もこちらへ・・・」

カルダスがマリアスに声をかけるも、マリアスはブルブルと首を横に振るばかり。

それを見てラディはふと思う。

(ミツキなら、私と一緒にお茶するのが嫌なの!?)

とか何とか言って説得するんだろうな。)

ラディからすると、いつもマリアスを見てると齒痒くイライラする。けれどミツキは、マリアスに一度も男のくせにとか言ってるのを見た事がない。

多少強引だが、マリアスの意思で無理矢理って事もしていないように思う。

「分かりました。では、マリアス様はそちらで結構でございます。

まずラディ様、こちらの認証をご覧ください。」

カルダスが差し出した書面に目をみはるラディ。

「これは・・・父上が出したレアの認証？一体どうやって？」

貴族は自らの家名に傷がつく事を何より恐れる。

ミツキにも説明したが、病気の孤児を助けたいという思いがあっても、

もしその孤児がちょっとした盗みを働いた場合、責任を被る事になるのだ

・・・例えそれにやむを得ない理由があろうとも。

だから、ラディはミツキに自分の家から認証は出せないだろうと言った。

しかし今、ラディの手にあるのは紛れもないレアの認証　。

「ラディ様が父上様に封書を渡された時、何か訊かれませんでしたか？」

尋ねられたラディは、あの時の事を思い返す。

「父上は・・・いいのかと・・・。」

「ラディ様は何と？」

「ああって・・・まさか・・・。」

「あの手紙には、孤児の事は一切書かれておりません。」

内容は、あなた様の事でございませぬ。」

「俺の？」

「ええ。ラデイ様を王子の近衛にする為の認証を出してもらつ事。

側付きの従者として一名、雇用許可証も出していただきました。」

ウインスター家は、考えるだろう。

政治的には何の役にも立たない三男坊を将来の国王である王子の側に置くことで家にとってどれだけメリットが高いかを。

知恵遅れと噂される王子だ。

近くにいれば実権を握る事も不可能ではないと。

手紙には、認証の記載の仕方が細かく指示されていた。

当主も疑問には思つただろうが、密約の為敢えて抽象的な

表現であると考えた。

「ウインスター家は、あなたを王子の近衛役として認める旨の書面のつもりで書いたものですが・・・こちらで少々手を加えさせていた  
だき、

孤児の認証といたしました。

・・・これが知られば重罪ですが、書面に不備はございません。

家の紋様が入った羊皮紙に当主の印と署名。

国に提出すれば、十分に効力がございます。

更には、実際ラディ様を近衛にすれば書面を再び

確認しようなどと思えますまい。」

カルダスの説明を聞いていたラディが呟く。

「マリラス・・・お前、ウインスター家をペテンにかけたのかっ！」

「ひいっ！」

ラディは立ち上がってマリラスの胸ぐらを掴む。

「・・・認証・・・ほしいうって・・・」

震えながらマリラスが訴える。

「おやめください。マリラス様は皆の利益になる事しかされておりませんよ。」

まあ、ラディ様には騎士団の団長になるのは

諦めていただかなければなりません・・・。」

怒りに唇を噛みしめつつも、ラディはマリアスの服から手を外す。身分的にいえばラディは出世したといってもいい。

団長イスカより、立場は上になる。

だが、ラディは出世欲をさほどもっていないわけでもない。

ただ、団長イスカの傍にいて剣の腕を磨きたい。

希望するのはそれだけだというのに……。

「くそっ！……分かった。

マリアス、お前の策にのってやる。

ただし……俺に隠し事はするな。

また、俺を騙すような事したら……その時は命はないと思えよ。」

ラディの鋭い眼光にマリアスはびりつつもコクコクと頷く。

「秘密……しない……」

「全く……ミツキの意見に流されるんじゃないな……。」

諦めの溜息と共に呟くラディ。

しかし、その後ラディは自分の決断を大いに悔やむ事となる。

その23。(後書き)

こんばんわ。

初めてのかたもそうでないかたもどうもありがとうございます。

白痴王子マリアスの側近になってしまったラディ。

今後は、表に出れないマリアスの手足となって知略戦略で癖のある王宮の人々と立ちまわるハメに……。

諸事情で更新ペースがのんびりになりますが、気長にお付き合いくださいませ。



## その24。(前書き)

IDやらPWを書いたメモを紛失してしまいました(´・`・´)  
手続き面倒だな〜ってことで、放置していたんですが、今更発見。  
話忘れてます……。ど、ど、どうしよう……。あ。『さーち』の方  
はあなざー版を書いておりますので、よかつたら読んでやってくだ  
さいませ。

## その24。

大会が終わって、ラデイがクビを宣告されて、ついさっきマリアスのところへ刺殺しそうな勢いで走っていた後　　。

取り残された私とイスカ団長。

ラデイってば大丈夫かな？

私も追いかけた方がよかつたのかな？

「大丈夫だよ。二人だけにした方がいいと思うよ。」

私の心を読んだみたいなタイミングでイスカ団長が口を開いた。

「それよりさ・・・オナカ減らない？」

「減りました。」

私の間髪いれずに答えると、イスカ団長はクスリと一瞬笑う。

「タダでたらふくメシの食える場所があるんだけど、行かない？」

えっ。

これって・・・、新手のナンパとかじゃないよね？

イスカ団長をみる。

.....

下心と言うより、本当にオナカがすいてる様子。

「行きます!」

「うん。じゃあ、行こう。」

私とイスカ団長は、こうして王城の騎士団用の食堂へと向かった。

食事は微妙だったけど慣れるとこのチープな味もいくなって気になつてきた私は、イスカ団長とそこにいた新米騎士の人達と飲んで騒いで楽しい時を過ごした。

団長が横にいてくれたから、新米騎士の人達も節度を持ってセクハラもなく

私に接してくれる。

「お酒いる?」

イスカ団長が声をかけてくれるが生憎私は高校生。

未成年だからお酒がダメって決まりはこの国にはないみたいだけど、

私は首を横に振る。

「いない。」

「うん。」

イスカ団長のあっさりした対応は、気を使わなくて心地いい。

こうして気づいた時には夜も更けていて、マリアスのところに行くのは

明日にして早々に、ベッドへ潜り込んだ。

翌日、朝練は大会の疲れもあるだろうからということで休みになり、

昼過ぎに私はマリアスの部屋へと向かった。

扉をノックすると、すぐにカルダスさんが開けてくれる。

「昨日は大変な活躍だったそうですね。準優勝おめでとうございます。」

「さあ、どうぞ。」

恭しく紳士な微笑で私を招き入れる。

と、そこにいたのはマリアスと……。

「ラ、ラディ！？……ぷっ！くっ……くく」

私は呆気にとられた後、笑いをこらえるのに必死だった。

でも、こらえようとすればするほど、それは無理な相談だ。

受け狙い？

罰ゲーム？

身体をくの字にして耐える私に向かって当のラディは眉間に深い皺を寄せる。

「い、ごめっ！……し、し、白タイツって……！」

そう、いつぞやマリアスが着ていたようなぱつぱつの白タイツを

ラディが履いているのだ。

今まで、騎士団の制服姿とワイルド系の私服しか見たことが無いのも手伝っていると思うんだけど、それでも全く似合っていないのは確かか。

「こっつて見ると貴族のおぼっちゃまって感じがするよ……ぷっ」

私が懸命にフォロー発言をすると、ラディの眉間により深い皺が。

「おまつ……、全力で俺をバカにする気だな。」

「バカになんてしてないでしょ?! そつちこそ、私に対してどんなバツゲームよっ!」

「なにっ」

「あ……だめだ。……ぷっ」

私は限界が来て、大爆笑。

今にも掴みかからんばかりのラディをマリアスがオタオタと宥めている。

「ミツキ……ラディ……ケンカだめだよ……」

「そーよー、こんな事の為に尋ねてきたわけじゃないんだからっ」

私は、ひとまず笑いを収めることに成功した。

「レアの件はどーなってるの?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1755j/>

---

美少女はじめました。

2010年10月10日01時11分発行